

古代石背地方古期屋瓦考

戸 田 有 二

目 次

はじめに

(一) (二)

一 石背地方における古期鑑瓦の四系統

(一) 八葉単弁蓮花文鑑瓦

(二) 複合波文縁六葉複弁蓮花文系鑑瓦

(三) 素弁系蓮花文鑑瓦

(四) 雷文縁複弁蓮花文鑑瓦

二 石背五郡古期屋瓦の需給関係

三 石背五郡古期鑑瓦の製作技法

むすび

はじめに

(一)

大化前代の東北地方南部地域は、信夫国造・阿尺国造・石背国造・

白河国造・伊具国造・浮田国造・染羽国造・道尻岐閉国造・石城国造・道奥菊多国造・道口岐閉国造など十前後の国造支配によって統治されていたことが『先代旧事本紀』の「国造本紀」からうかがうことができる。これらの国造による支配地域は、南は茨城県北部から栃木・福島両県にかけての県境地域より北側、北は宮城県南部地域の阿武隈川を境にした南側の地域にかけての広い地域である。同じ東北地方でも、こういった南部地域は北部地域（阿武隈川北岸以北）より比較的早い時期に大和朝廷との交流が盛んであったことがうかがえる。大化の改新による国郡制の設置により、こういった大化前代の国造支配圏は、それぞれ陸奥国の郡としての行政区画に改められて行くものであった。大化改新後、律令制社会を形成し、新し技術の発展などは、目ざましく特に新開地の開拓は、東国をその基盤として『道奥国』に多く注がれた。特に大化の改新から七十余経った時期には、和同年間に、越後国の北部を割いて出羽国の設置をはじめとして、養老二年には能登・安房の国々がそれぞれ設置され、さらに同五年には諏訪国も設置される。こういった中でやはり養老二年、石背・石城の両国も

東北地方南部の郡を割いて設置される。

大化改新より七三年後の養老二年五月二日の統日本紀に次の様な記事が見られる。

乙未。割_三越前国「之」羽昨。能登。鳳至。珠洲_四郡。始置_二能登_一国。割_三上総国「之」平群。安房。朝夷。長狭_四郡。置_二安房_一国。割_三陸奥国「之」石城。標葉。行方。宇太。日理。常陸_四国之菊多六郡。置_二石城_一国。割_三白河。石背。会津。安積。信夫。五郡。置_二石背_一国。割_三常陸国多珂郡之郷二百一十烟_二名日_三菊多郡_一属_二石城_一国_二焉。

つまり、この統日本紀養老二年五月二日の記事は、越前国より能登国が、上総国より安房国が、陸奥国より石背・石城両国がそれぞれ分離設置された記事にはかならない。

石背国の場合陸奥国の南部地域つまり現在の福島県中通り地方及び会津地方を中心とした、白河・石背・安積・信夫・会津の五郡を分離させて、『石背国』としての行政区画を設置したものである。いわゆる石背国の設置である。しかし、養老二年より後十年後にあたる神亀五年四月、統日本紀には次の様な記事が見られる。

丁丑。陸奥国請_下新置_二白河軍団_一。又改_二丹取軍団_一為_二玉作軍団_一。並許_レ之。

といった記事である。この記事はこの年、新たに白河軍団を設置し丹取軍団を改めて玉作軍団としたという内容のものである。この記事で重要なことは『陸奥国云々白河軍団』と記載されていることにある。養老二年陸奥国南部地域の白河郡はじめ五郡を割いて設置されたはず

の『石背国』が十年後の神亀五年には、またもとの陸奥国の行政区画にもどされたことをうらやめるものである。直接石背国に於ける停廃記事は見られないが、養老二年以降石背国として記載された記事に、

類聚国史・卷八十三・養老四年十一月甲戌条に

勅。陸奥。石背。石城。三国調庸并租。減免之。唯遠江。常陸。美濃。武蔵。

越前。出羽六国者。免_二征卒及廝馬從等調庸并房戸租_一。

と見られる記事あるいはこの他にも養老令の条文でも『戸令新付条』及び『軍防令帳内条』においても、陸奥・石城・石背の国名が記載されている。したがって実際に石背国の停廃がなされるのは、これらの記事からして養老五年以降ということになる。そして神亀五年以降について、白河・石背・会津・安積・信夫の「石背国」五郡の記載についてはすべて「陸奥国」として記載されている。

(二)

東北地方における屋瓦の出現は現在のところ、七世紀後半代にはすでにあつたと考えることがほぼ妥当なところである。その分布も北は宮城県大崎地方から南は福島県全域にわたって認められる。そしてこれらの初期の古瓦はそれぞれの地域によって数系統の系譜が認められるようである。

特に石背・石城地方における屋瓦の分布はそれぞれの郡内にすでに認められ、その年代も上限が七世紀後半代から八世紀前半代にかけて造瓦が行なわれていたことが明らかである。幸いなことに石背・石城

地方におけるこういった屋瓦出土の遺跡については、昭和三十年代より発掘調査が着手される。従って、これらの遺跡の性格についての考察は若干なりともなされてきた。ここでは、これら石背地方の郡内の屋瓦出土遺跡とその研究成果について概観する。

白河郡は、石背地方の最南端に位置し、十七郷の大郡である。郡内における屋瓦出土遺跡は棚倉町流廃堂跡^(註1)、東村安藤遺跡^(註2)、泉崎村、関和久遺跡、同関和久上町遺跡、借宿廢寺跡などがあげられ、瓦窯跡では大岡瓦窯跡群、カニ沢瓦窯跡群、関和久瓦窯跡群が確認されている。これらの中で東北地方における古期瓦を出土する遺跡は泉崎村関和久遺跡、同上町遺跡・白河市借宿廢寺跡とこれらの遺跡に供給した大岡瓦窯跡・カニ沢瓦窯跡である。関和久遺跡は阿武隈川北岸の泉崎村大字関和久字明地池及び中宿並びに古寺地区にかけて営まれた遺跡である。この遺跡について直接学問的に注目されるのは大正十五年故岩越二郎氏による現地での古瓦採集にはじまる。その後昭和十年内藤政恒氏によって「磐城国西白河郡五箇村借宿の遺跡遺物」と題して世に紹介され、正式な発掘調査は昭和四十七年度から五十六年度まで十か年にわたって実施された^(註4)。報告によると明地地区で東西二六〇メートル、南北一三〇メートルの東・西・南側を大溝で区画し、北側は盆どの川をもって北限とした倉院が確認された。倉院内部にはこれに伴う四期変遷の建造物跡が検出され、時期的には上限が七世紀末～八世紀初頭頃、下限が十世紀前半頃と推定され、中宿・古寺地区は明地地区と北側に位置し、この地内でも官衙跡構造をもった五期変遷の建造物跡

が確認され時期的には明地地区の倉院と同時期と推定された^(註5)。関和久遺跡の性格について古くは、続日本紀神龜五年の条に記載された「白河軍団」跡、あるいは養老二年設置の「石背国府」跡、さらには神龜年間に設置された多賀柵以前の「陸奥国府」跡など多くの推定がなされてきた。しかし発掘調査の結果この遺跡は古代白河郡衙跡と推定されるに至った。また関和久上町遺跡は関和久遺跡の北東約五百メートルの上町地内に位置する。昭和五十七年度より発掘調査が進められており掘立建造物跡及び井戸跡等が確認されている^(註6)。さらに借宿廢寺跡は関和久遺跡南西八百メートルの阿武隈川対岸の借宿地内に位置する。この地には現在も東西に並列した土壇跡が遺存し礎石も確認できる。古瓦片の他、奈良時代前期の小型埴仏出土地としても著名である。石田茂作・内藤政恒氏によって法隆寺式伽藍配置が想定された寺院跡である。これら三遺跡の性格については関和久遺跡が白河郡衙跡で借宿廢寺跡はその附属寺院跡と考えられ、上町遺跡については明瞭でない。出土瓦は創建期の瓦として三遺跡ともに同範または同種のものである^(註7)。鍔瓦は複合波文縁六葉複弁蓮花文で五種ある。いずれも印籠つぎ技法によるものであるがこのうち創建期の瓦は図一の①・③・④・⑤の四種である。この鍔瓦とセット関係になる他の瓦は宇瓦がロクロ挽き重弧文系で、男瓦は粘土板巻き技法、女瓦は粘土板桶巻き技法によるものである。

一方供給瓦窯については三か所確認されている。南西約三キロに位置する大岡瓦窯跡^(註8)、北東約三、三キロの地点に位置するカニ沢瓦窯跡^(註9)、

表1 白河郡創建期屋瓦の需給関係

遺跡名	瓦Ⅲ ^b	瓦Ⅲ ^A	瓦Ⅱ	瓦Ⅰ	文六 坂升瓦 台復縁 葉集
関和久		○(カニ沢)	○(カニ沢)	○(大岡)	○(大岡)
上町	○(カニ沢)	○(カニ沢)	○(カニ沢)	○(大岡)	○(大岡)
借宿				○(大岡)	○(大岡)
米山寺	○(カニ沢)				

上町遺跡の北西丘陵北斜面に営まれた関和久瓦窯跡^(註10)がそれである。このうち大岡瓦窯が最も古い時期のものでややおくれてカニ沢瓦窯、その後関和久瓦窯が築窯される。これら創建期瓦窯跡出土の屋瓦群と関和久遺跡出土の屋瓦群を比較した結果表1の様になる。(女瓦の分類は報告書による。)

次に石背郡内であるが白河郡の北側に位置し、七郷から構成された郡である。郡内の古瓦出土地は天栄村の十日森遺跡、同紺屋遺跡、同国造遺跡、須賀川市上人壇廃寺跡・米山寺跡などがある。このうち古期の屋瓦出土遺跡は十日森遺跡、上人壇廃寺跡、米山寺跡の三か所である。十日森遺跡は天栄村を東流する釈迦堂川南岸台地上の十日森地

内一帯の古瓦散布地をさす。この地域は隣接して南西八百メートルの場所に古瓦を出土する紺屋遺跡^(註11)、東約一キロには「文部氏の銅印」^(註12)を出土した志古山遺跡などがある。特に志古山遺跡については、昭和五十九年・六十年度に発掘調査が実施され大型の掘り方をもつ建造物跡が数棟確認されている^(註13)。またこの台地上の釈迦堂川をはさんだ対岸では昭和四十八年に調査された古瓦出土の奈良平安時代集落跡国造遺跡^(註14)あるいはこれに隣接して前方後円墳の龍ヶ塚古墳^(註15)などが存在する。こういったこの地域における前方後円墳及び集落・大型の掘り方を伴なう建造物跡あるいは古瓦出土遺跡などから石背郡の中心のおかれた一地域とも考えられる。

上人壇廃寺跡は須賀川市中心部の北西で阿武隈川に東流する釈迦堂川が合流する地点の北岸に位置する。昭和三十六年東北線復線化に伴なつての発掘がきっかけで翌三十七年にも実施された^(註16)。その後昭和五十一年度から五カ年にわたって史跡上人壇廃寺跡環境整備事業の一環として再度の調査が実施される^(註17)。遺跡は内郭と外郭からなる大規模なもので、調査は主に内郭部を中心に実施された。その結果第一期創建期の内郭は一辺七メートル四方の築地で囲まれ、南門、東門、北門がそれぞれ設置されている。築地の内側には北側中央に一辺八間×五間の掘込地形の東西棟が置かれ、その左右には二間×三間の掘立建造物が配置される。南門と北側の有礎建造物の間隔は広く、その間に遺構はない^(註18)。外郭は末調査であるため詳細は不明であるが、一辺八百メートルの溝跡の痕跡が東、西、北で確認され、南側で釈迦堂川に連

結されるものと思われ、これをもって外郭線と推定する。創建期の鑑瓦は波文縁六葉復弁蓮花文で印籠つぎ技法による。この鑑瓦とセット関係の屋瓦群では宇瓦が手描きの重弧文と単弧文で文様面は分割後ある程度乾燥した段階に手描きしたものである。男瓦は無段式で粘土板巻き技法・粘土紐巻き上げ技法の二種ある。女瓦は粘土板桶巻き技法。創建期瓦は南側築地南門の南西約二〇メートルの斜面に構築された瓦窯での生産である。

米山寺は上人壇麁寺跡の西約八百メートルに位置する。米山寺が古代寺院跡として世に知られたのは明治四年に発見された三号経塚出土の「承安元年（一一七一）」銘の陶製外筒に他ならない。その後、昭和四十六年からの調査ではさらに七基の経塚が確認され合計十基となった。この時の調査では寺院跡についても実施され十棟以上の建造物が確認された。建造物跡は掘立柱によるものとそれに先行する有礎建造物跡が確認されているが、古瓦はこの有礎建造物に伴なうものである。軒先瓦は不明であるが、女瓦は粘土板桶巻き技法が創建期である。これらの瓦の一部はカニ沢瓦窯跡による生産品である。

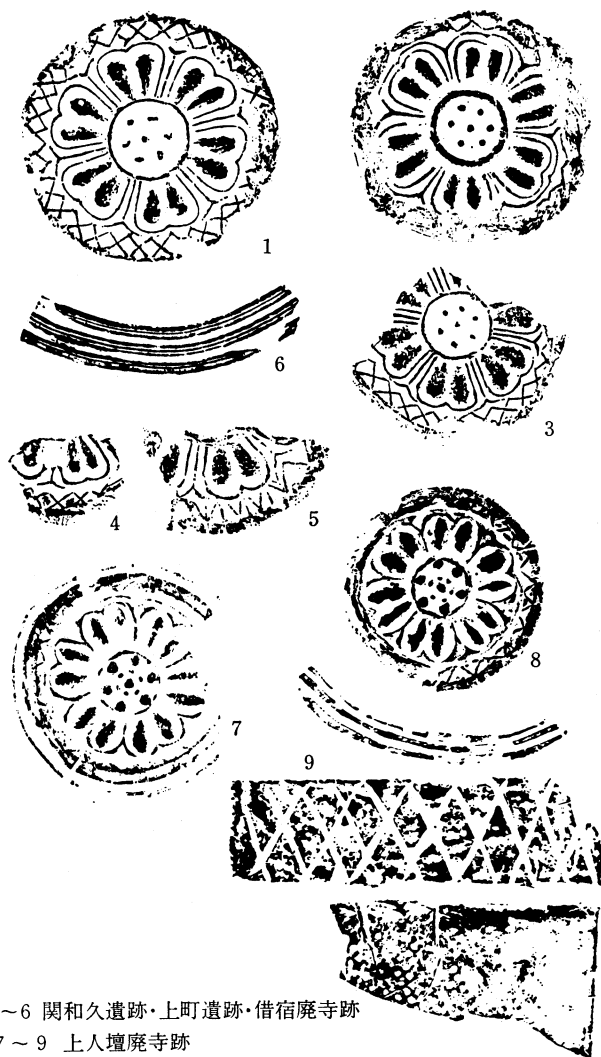
安積郡は石背国のはば中央に位置し、八郷から構成される。郡内の古瓦出土遺跡は音路の蓮華堂跡及び清水台遺跡であるが、古期の屋瓦は清水台遺跡にみられる。清水台遺跡は国鉄東北本線郡山駅西側の台地上に位置する。この遺跡については享保十三年、今泉道清著『虎丸長者の古事』、寛政六年、増子三左エ門の『永公記録』、文政四年、今泉貞一の『貞一随筆』、文政九年、増子源之承の『旧記聞書』、天保十

二年、大鏡義鳴の『相生集』など江戸時代から多くの研究者によって虎丸長者跡として注目されてきた遺跡である。

一方、遺跡の発掘調査は、昭和三十九年八月第一次調査が開始されて以来昭和四十九年度に第二次調査^(註21)、同五十年年度に第二次調査^(註22)、同五十一年度^(註23)に第四次調査^(註24)、第五次調査は同五十三年に、第六次調査は同五十三年度^(註25)、第七次調査は同五十五年^(註26)、第八次調査は同五十九年度^(註27)、第九次調査は同六十年度^(註28)に実施されている。これら九次にわたる二十五か所の調査結果、二十五棟以上の掘立建造物跡、あるいは大小の溝跡等が確認された。検出された遺構の配置等から安積郡衙跡に推定されるに至った。出土屋瓦は鑑瓦が九種^(註29)、宇瓦が六種に分類され、女瓦は十七種、男瓦は十二種に分類された。このうち創建期瓦は鑑瓦二種^(註30)、宇瓦一種、女瓦三種、男瓦二種になることが供給瓦窯との比較で確認された。創建期の鑑瓦は、複合波文縁六葉復弁蓮花文鑑瓦及び八葉単弁蓮花文鑑瓦と考えられこれらとセットになる他の屋瓦類は宇瓦がクロ挽き重弧文、男瓦が粘土板桶巻き技法、女瓦は粘土板桶巻き技法によるものである。供給瓦窯は単弁八葉蓮花文鑑瓦が麓山瓦窯跡^(註31)で、波文縁六葉復弁蓮花文鑑瓦が開成山瓦窯跡で確認されている。

信夫郡は石背国最北端に位置し八郷から構成され、陸奥国と境する。郡内の古期屋瓦は瓦窯跡を除いては腰浜麁寺跡で確認されている。腰浜麁寺跡は阿武隈川の西岸で信夫山の南側に位置する。天保十二年に志田正徳の『信達一統志』ですでに、この地における古瓦の散布状況から、七堂伽藍の存在が指摘されている。腰浜麁寺が世に紹介された

のは木口昇氏蒐集の古瓦を昭和三年関野貞氏によって『考古学講座』で発表されたことにはじまる。その後昭和九年には石田茂作博士が岩波講座日本歴史の『仏教の初期文化』で、また昭和十四年内藤政恒博士も『東北地方出土の特異文様古瓦について』（『夢殿論叢』）で取扱われた。昭和四十年代後半までこれらの瓦は多賀城創建以後のものとされて来た。しかし前述の昭和九年に発表された石田茂作博士の『仏教



1～6 関和久遺跡・上町遺跡・借宿廃寺跡
7～9 上人壇廃寺跡

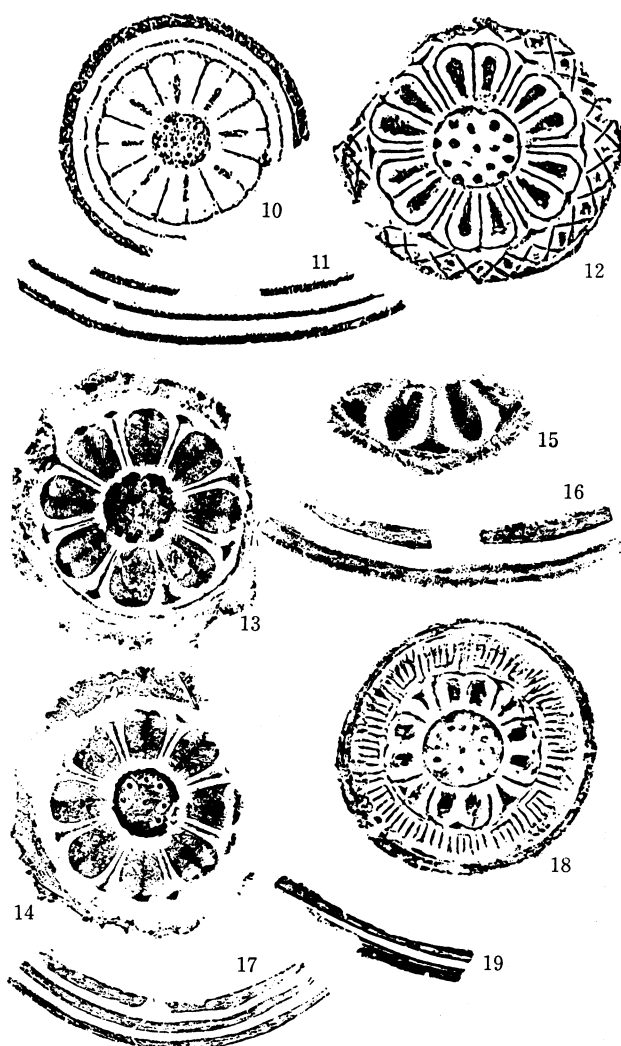
図1 石背地方出土古瓦

瓦は八葉素弁蓮花文鏡瓦三種と、ロクロ挽きの単弧文・重弧文字瓦で、男瓦は粘土板巻き技法、女瓦は粘土板桶巻き技法によるものである。^(註34) 会津郡は九郷から構成され、現在の会津地方を指すものである。郡内に於ける瓦出土遺跡は会津若松市で山口瓦窯跡が確認されている。昭和四五年居合団地造成に伴って発掘された瓦窯跡である。合計八基調査されうち瓦窯跡は一ノ五号まで、他の三基は須恵器窯跡である。

の初期文化』では同廃寺出土の八葉素弁蓮花文鏡瓦を当時すでに白鳳時代とされていたことは現在あらためて注目される。その後、腰浜廃寺跡は昭和三十五年から三十八年まで四次にわたって供給瓦窯跡の宮沢・赤埴両瓦窯跡とともに発掘調査された。やはこの結果においても創建期瓦は多賀城創建以後に考えられたものであった。^(註32) しかしその後、当時の遺跡発掘担当者である伊東信雄博士によって同廃寺跡創建屋瓦の年代が多賀城跡創建以前で七世紀後半代^(註33)まで遡りうるものであらうと訂正された。その後調査は昭和五十七年度まで三回実施された。出土屋瓦のうち創建

窯跡は地下式登窯で特に一・二・五号窯はロストル式の登窯である。
 出土瓦は雷文縁四葉複弁蓮花文鍔瓦とロクロ回転利用のヘラ描き単弧
 文、粘土板巻き技法の男瓦、粘土板桶巻き技法の女瓦である。

一 石背地方における古期鍔瓦の四系統



10・11 麓山瓦窯跡(清水台遺跡) 12 清水台遺跡
 13～17 腰浜廃寺跡 18・19 山口瓦窯跡

図2 石背地方出土古瓦

以上が白河郡内の関和久遺跡・関和久上町遺跡・借宿廃寺跡・石瀬郡内の十日森遺跡・上人壇廃寺跡・米山寺跡・安積郡内の清水台遺跡・信夫郡内の腰浜廃寺跡・会津郡内の山口瓦窯跡等の遺跡について概観した。これら白河・石瀬・安積・信夫・会津の五郡は養老二年石背国設置当初から置かれていた最も古い郡である。そしてこれらの遺跡はいずれもその遺構及び遺物から少なくとも養老二年の段階では存在していたものと考えられる。古くは東北地方における屋瓦について最も古期の段階が多賀城創建期瓦とされ、それ以前の瓦は存在しないと考えられて来たものである。しかし近年多賀城創建よりも古い瓦が宮城県及び福島県において存在することが指摘される様になって来た。これら石背国に於ける五郡内出土の屋瓦もすべてその初期のものは、多賀城創建以前に位置づけられる屋瓦類である。東北地方における古期の屋瓦には鍔瓦文様に素弁蓮花文系、単弁蓮花

文系・複弁蓮花文系の三種類が認められ、さらに数種の形態が存在する。こういった古期屋瓦は、石背国内でも例外ではなく、腰浜廃寺跡出土の八葉素弁蓮花文系鑑瓦^(一)、清水台遺跡麓山瓦窯生産の八葉単弁蓮花文鑑瓦^(二)、石背国南部を中心に分布する複合波文縁六葉複弁蓮花文系鑑瓦^(三)、山口瓦窯跡出土の雷文圈四葉複弁蓮花文鑑瓦^(四)等、四系統の鑑瓦文様が存在し、これらの屋瓦はいずれもほぼ同時期項に位置づけられるものである。

(一) 八葉単弁蓮花文鑑瓦

1

この種の八葉単弁蓮花文鑑瓦については、県内での出土例が現在のところ麓山瓦窯跡だけである。しかしこれと組になる宇瓦、つまり「ロクロ挽き重弧文」の類例は借宿廃寺跡・関和久上町遺跡・腰浜廃寺跡^(註38)などで、また石城国では、夏井廃寺跡・郡山五番遺跡^(註39)、黒木田遺跡^(註40)などの創建期瓦に類例がある。これらの創建期瓦の一つの大きな共通性は、ロクロ挽き重弧文系とともに女瓦では粘土板桶巻き作り、男瓦では粘土板巻き作りがそれぞれセットとなるところにある。東北地方におけるロクロ挽き桶巻き作り重弧文宇瓦については県内例の他は宮城県にその類例がある。仙台市郡山遺跡^(註41)・同市大蓮寺窯跡^(註42)・古川市名生館遺跡^(註43)・同市伏見廃寺跡^(註44)・同市三和田遺跡^(註45)などであるが、これらの造瓦技法は多賀城創建時における造瓦技法よりも古いことは既に指摘されているところである^(註46)。また女瓦も一枚作りに対して桶巻き作り

が先行することは一般的通例で、男瓦も紐作りに対して板作りが先行すると考えられている。福島県内の例でもこの技法は多く認められるが特に、東北地方において、宮城県名主館遺跡・伏見廃寺跡のものとともに、最古のグループと考えられる腰浜廃寺跡・関和久遺跡とその関連遺跡の場合、いずれも創建期の鑑瓦、宇瓦のセットとして板作りの男瓦がともなっているが、紐作りに対して板作りの男瓦が先行する^(註47)。これらの瓦の実年代はいずれも現段階では七世紀後半～八世紀初頭に位置づけられる。麓山瓦窯跡生産の瓦がこういった福島県内における古式の造瓦技法と同一技法であることは、比較的古い時期にあることを示すものであろう。この鑑瓦の製作年代は同一瓦窯跡群E窯跡より須恵器坏が出土しているが、これらの坏類はおおむね七世紀末～八世紀初頭に位置づけられるものである。したがって麓山瓦窯跡出土の鑑瓦を含めた瓦類についてもほぼ同時期頃と考えることができる。

2

八葉単弁蓮花文鑑瓦の瓦当文様の類例は、東北地方で比較的近似すると考えられるものに宮城県古川市所在の名生館遺跡・同市伏見廃寺跡出土のものがある。いずれも宇瓦はロクロ挽き重弧文で桶巻き作りによるものである。この種のものは、いずれもその文様祖形は山田寺式とされるが、それに比べて彫りも浅く、文様構成も簡略化されたものであるため、山田寺式の亜流と考えられる。その年代については大略七世紀末～八世紀初頭頃に位置づけられている^(註48)。名生館遺跡・麓山瓦窯跡出土の鑑瓦については両者ともに大略八世紀を中心とした前後

の時代に位置づけられているが、これと組になる宇瓦がともに桶巻き作りロクロ挽き重弧文である点からさほど时期的な違いはないものと考えるべきであろう。また鑑瓦を比較した場合、瓦当部と男瓦部の接合法は両者ともに瓦当裏面の周縁より印籠つぎの接合法であるが瓦当文様の構成は名生館遺跡出土の鑑瓦に比べて麓山瓦窯跡の鑑瓦は文様の彫が全体的に浅い。花卉も扁平的で弁端には反りがなく、中心凸

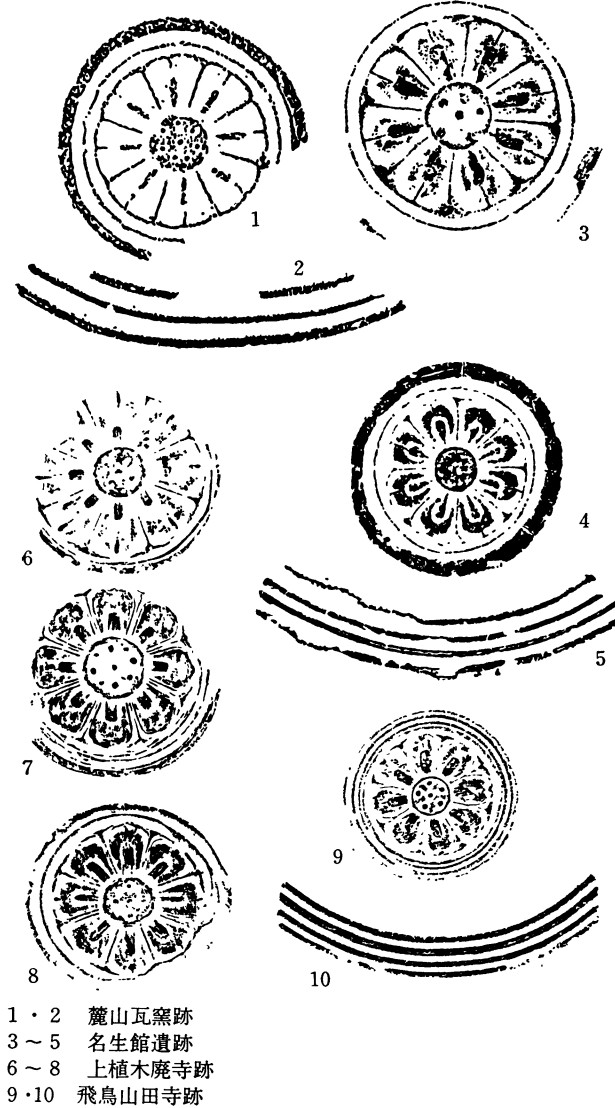
線がわずかにあるのみである。間弁先端の盛り上がりは低く花卉を囲むため、この内側が花卉となる。棒状の葺も扁平的である。などの相違点が両者に認められる。

以上麓山瓦窯跡及び名生館遺跡出土の鑑瓦を比較した結果、名生館、伏見、及び麓山瓦窯跡など出土の鑑瓦はその祖形が山田寺式と考えられているが、これらの瓦と山田寺出土の鑑瓦を比較した時、その文様

構成・製作技法などからある程度の時間的隔りを感じさせられる。

つまり、これらの瓦当文様が山田寺の鑑瓦を祖形としたものであったにせよ、直接その影響を受けたものでないことが推測できる。

図3 単弁系鑑瓦と重弧文字瓦



- 1・2 麓山瓦窯跡
3～5 名生館遺跡
6～8 上植木廃寺跡
9・10 飛鳥山田寺跡

山田寺系亜流の瓦当文様は山田寺のものが直接陸奥国にもたらされたものではなく、それ以前他の地域を経由してもたらされたものと考えられる。この種の瓦の類例を東北地方に近接した地域に求めるならば、関東地方にその類例を求めることができる。関東でもごく限定された地域で北武蔵から上野国にかけての地域に認められる。特

に上野国では伊勢崎市上植木廃寺跡を代表とする地域及び吾妻郡吾妻町金井廃寺跡などで出土する鑑瓦文様の一群が極めて類似する。これらの寺院跡より出土する鑑瓦はいずれも山田寺系のもので名生館遺跡出土の鑑瓦に比べて文様の構成及び製作技法等がより、山田寺に近いと言える。特に上植木廃寺跡出土のものが代表的なもので、この地域では最も古い。上植木廃寺跡ではこの種の瓦は少なくとも四種類以上確認されているが、いずれもこれと組になる宇瓦は桶巻き作りでロクロ挽き重弧文のものであるため、時期は上植木廃寺に於けるⅡ期の瓦である面違波文縁複弁蓮花文鑑瓦、つまり川原寺式の瓦に先行するⅠ期に位置づけられる。Ⅱ期の複弁波文縁鑑瓦は群馬県内では寺井廃寺跡・栃木県では下野薬師寺跡より出土しており、上植木廃寺跡出土の鑑瓦も含めてこれらの川原寺系鑑瓦は文様構成及び製作技法ともに下野薬師寺跡出土の創建瓦に極めて類似する。下野薬師寺の創建は天武天皇の時期であるためこれらの川原寺系の鑑瓦の上限は天武期に考えられる。したがって第Ⅱ期に先行する第Ⅰ期の山田寺系は少なくとも天武期を前後した以前七世紀前半代から中葉を前後した時期に位置づけられよう。上植木廃寺の性格については、上毛野氏の本貫地^(註48)に上毛野氏によって建立された寺院であったろうと推定されているが、興味ある指摘である。上毛野氏族といえは、大化前代も国造として東国に勢力を張った名門であるが、後に下毛野氏と分離され、上毛野氏族として上野国を基盤とし大化改新後まもなく、律令国家にいち早く名を連ねた東国きっての豪族である。

上毛野氏は代々軍事的面を司った一族で、大化前代には舒明天皇九年蝦夷の反乱に際し上毛野形名を朝廷は鎮庄の將軍に任命し討伐させるなど、大化改新後の律令政府では、天智天皇二年三月に上毛野稚子ら兵二万七千を率いて新羅討伐にあたるなど、大和朝廷時代から律令時代にかけて特に軍事的面で活躍したことが知られている。上野国において上植木廃寺は大化の改新を前後した時期に上毛野氏族の本拠地に建立された寺院で、その屋瓦から見ても群馬県に於ける最古の寺院跡である。大化改新を前後した時期の中央政界における上毛野氏の位置を考えた場合、本拠地における寺院の建立は当然考えられることであり、これが上植木廃寺であっても何ら不思議ではない。この上毛野氏が建立したと考えられる上植木廃寺の屋瓦と、陸奥国玉造郡における名生館遺跡出土瓦に極めて大きな類似点があることは両者に何らかの関連性の存在を考えなくてはなる。東国と陸奥における関連性は、中央政府から見ても東国は東北開拓上の基盤であり、陸奥はその最前線である。律令政府が東北開拓を進めるに際し、その地理的条件から東国がその基盤となっていることはいうまでもない。これにあたっては東国に本拠地をもち、代々軍事的面を司った東国きっての大豪族上毛野氏族がこれに関与したことは明瞭である。和銅元年陸奥守として「上毛野小足」の任命記事（続日本紀）、養老四年按察使上毛野広人の殺害記事（続日本紀）など、さらには上毛野の賜姓記事の多く見られることなどからも、上毛野氏が東北開拓に深く関与し、大きな役割を果たしていたことは容易に推測できる。

東北地方におけるこういった山田寺系といわれる八葉単弁蓮花文鑑瓦文様は直接山田寺より影響を受けたものでないことは文様面の構成などより明らかである。また上野国に分布する上植木廃寺跡出土の屋瓦に代表するこの種の屋瓦についても山田寺出土の鑑瓦文様と比較した場合、その大きな相違点は花弁の形態にある。山田寺の鑑瓦花弁に対して上植木廃寺の花弁は中房付近から弁端にかけて扇状に広がりを見せ、花弁は間弁につつまれた様な形となる。この点にある。こういった花弁のありかたは百済系素弁蓮花文鑑瓦の花弁と極めて類似する。こういった点を考えた場合やはり上野国における八葉単弁蓮花文鑑瓦の文様そのものが直接山田寺の影響を受けたものであるとは思えない。逆にいえば、上野国出土のこういった鑑瓦の特徴が東北地方出土の八葉単弁蓮花文鑑瓦文様と極めて類似するものである。今ここで東北地方出土のこの種の屋瓦が上野国をその中継地として陸奥国に入ったものではなかったかと簡単に即断することはできないが、少なくともこういった瓦当文様の類似点、あるいは造瓦技法の類似性、女瓦凸面に施文された米印タタキの存在等々多岐にわたって類似性を見いだすことができる。そして当時古代東北地方に大きな役割を果たした上毛野氏の本貫の地域に分布するこれらの類似点は、当時の東北経営という時代背景を考えた時、何らかの関連性があったもおかしくないと考えたくなる。

(二) 複合波文縁六葉復弁蓮花文系鑑瓦

1

東北地方南部を中心として広い分布をもつものに複合波文縁六葉復弁蓮花文鑑瓦がある。この種の鑑瓦は瓦当面周縁に凸線による複合波文または単なる波文をめぐらし、花弁は六葉の複弁蓮花文の鑑瓦である。これらの鑑瓦は角田市郡山遺跡、郡山市清水台遺跡、須賀川市上人壇遺跡、泉崎村関和久遺跡、関和久上町遺跡、白河市借廃寺跡、いわき市夏井廃寺跡、根岸遺跡、北茨城市大津廃寺跡より出土しており、その分布の中心は石背国南部地域にあるが、北限は宮城県南部、南限は茨城県北部太平洋側にかけて認められる。これらの遺跡について概略するならば、最北端の角田市郡山遺跡は昭和四十年発掘調査が実施され有礎建造物の確認がなされている。調査の結果、その性格については、古代伊具郡衙と推定されている。^(註49) 石背国内に於ける清水台遺跡・上人壇廃寺跡・関和久遺跡・関和久上町遺跡・借宿廃寺跡については前章で概説したので詳細はそれにゆずるが、清水台遺跡は安積郡衙跡と推定され、上人壇廃寺跡は古代石背国府跡または関連遺跡と考えられる。また関和久遺跡は白河郡衙跡で借宿廃寺跡はその附属寺院跡と考えられている。上町遺跡の場合関和久遺跡と隣接するもののその性格については明瞭でない。この三遺跡ともに白河郡内に営まれたもので、鑑瓦についても同範関係にある。石城国では根岸遺跡、夏井廃寺跡で認められるがともに石城郡内に位置し鑑瓦についても同範関係にあり、古くから古瓦出土で知られていたものである。^(註50) 両遺跡の関係は、根岸遺跡が通称長者平といわれる低丘陵中腹付近に位置する遺

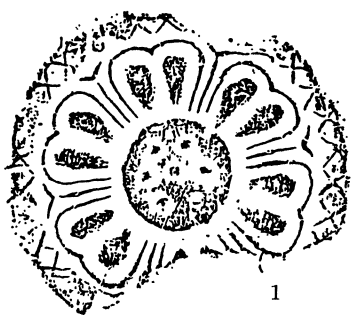
跡で、夏井廃寺跡はこの丘陵と接した北側約三〇〇メートルの低地に営まれた遺跡である。その性格は根岸遺跡が石城郡衙跡として、夏井廃寺跡はその附属寺院跡と考えられている。大津廃寺跡は常陸国多珂郡に位置する。北茨城市大津町の海岸沿いに発達した低丘陵上に営まれたもので、古くから古瓦出土の存在は知られていた。基壇上に馬頭観世音が祀られていたことから馬頭観世音廃寺跡または馬頭観世音遺跡とよばれていた遺跡である。昭和五十四年に発掘調査が実施されその結果小規模堂跡をもった寺院跡と相定されている。^(注5)以上複合波文縁六葉複弁蓮花文鑑瓦は宮城県南部・福島県南部・茨城県北部地域九遺跡に分布するものである。

2

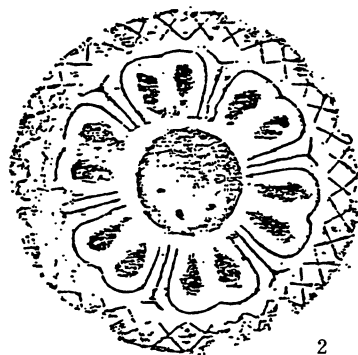
これらの出土鑑瓦文様面を詳細に比較検討した結果九遺跡中、同一郡内においてのみ同範関係が成立し、郡または国を異にした地域での郡衙跡または寺院跡では、いずれも別の範によって製作されたものであることがわかった。これらの瓦当文様として周縁では(一)波文縁周縁によるもの、(二)複合波文縁によるものに分かれ、(一)は角田市郡山遺跡、上人壇遺跡、(二)はその他の七遺跡出土のものである。また花弁はいずれも切り込み反転式であるが、角田市郡山遺跡及び清水台遺跡の弁央が稜ではっきり二面分割されるものと、その他の遺跡から出土の二面分割されるが、弁央に陵をもたないものがある。鑑瓦文様では以上のような特徴を見出すことができるが、あくまでもこれは鑑瓦瓦当面だけの比較である。次にこの製作技法及び鑑瓦と字瓦・女瓦・男瓦がど

表 2 遺跡ごと製作技法組合せ対比表

遺跡名	瓦の組合せ関係	鑑瓦と男瓦の接合					宇 瓦			男 瓦			女 瓦			生産窯
		印籠	接着	口挽文	クロ重弧	手描文	描文	範ぬき	無段式粘土板巻	無段式粘土板	無段式粘土紐	粘土板巻	粘土板巻	凸面痕の目もある	布にある	
角田市郡山遺跡		○						○	○			○				不明
清水台			○						○			○				開成山瓦窯
上人壇		○				○			○	○		○				上人壇瓦窯
関和久		○			○				○			○				大岡瓦窯
上町		○			○				○			○				〃
借宿		○			○				○			○				〃
根岸			○	○					○			○				不明
夏井			○	○					○			○				〃
大津		○		○					○	○		○	○			〃



1



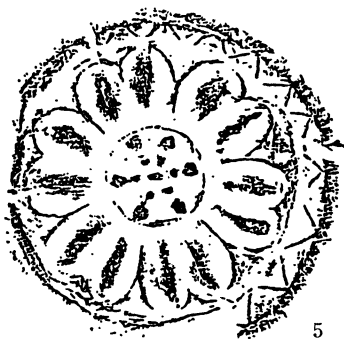
2



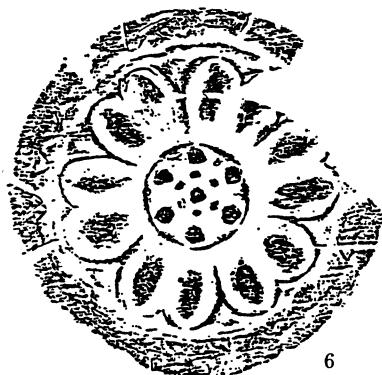
3



4



5



6



7



8

1・2 関和久遺跡・上町遺跡・借宿廃寺跡 3 清水台遺跡 4 夏井廃寺跡・根岸遺跡
5・6 上人壇廃寺跡 7 大津廃寺跡 8 角田市郡山遺跡

図4 波文縁六葉複弁蓮花文鑑瓦

の様な組合になっているのかきわめて重要な意味をもっているのですね。それらについて遺跡ごとに検討して見た。その結果が表2である。

まず鏝瓦当裏面での男瓦部との接合法では印籠つぎ技法と接着法に近い技法の二系統がある。

後者の接着技法とは、瓦当裏面に男瓦を貼りつけるだけであまり補強用粘土を用いない方法である。ここでいう接着法は飛鳥時代の百済系鏝瓦に見られる接着法とは若干異なったものである。石背国における古期鏝瓦には、男瓦との接合技法に大きく五種あるが、主流は印籠つぎ技法で、後々の時代まで主流として存在する。宮城における接合技法もやはりその主流は印籠つぎ技法で岩手県においてもこの技法は平安時代に受けつがれる。

また石城国を中心とする接着技法はこの種の鏝瓦のみならず他にも郡山五番遺跡・泉廃寺跡・黒木田遺跡などから出土する別の文様系統の古期の鏝瓦にも認められ、石城国ではほぼ全域にわたって古期の瓦に採用された技法で、いわば主流的存在といえる。またこの技法は石城では、次の時期にこの技法から変化した印籠つぎ技法に近い技法が接着法の分布と同一範囲で行なわれる。この技法は石背国で主流を示める印籠つぎ技法とは若干異なるものである。

次にこれらの鏝瓦と組み合せとなる他の屋瓦について検討した結果次の様な結果が得られた。宇瓦の場合三群に分類できる。

- (A) 粘土板桶巻き技法ロクロ挽き重弧文字瓦（借宿廃寺跡・関和久遺跡・上町遺跡・根岸遺跡・夏井廃寺跡・大津廃寺跡などで最も

多い。）

- (B) 粘土板桶巻き技法手描き重弧文字瓦（上人壇廃寺跡）

- (C) 粘土板桶巻き技法範ぬき文字瓦（角田市郡山遺跡）

男瓦・女瓦の場合もやはり三群に分類できる様である。

- (A) 男瓦は無段式の粘土板巻き技法、女瓦は粘土板桶巻き技法。この両者がセットになるもの。

（借宿廃寺跡・関和久遺跡・同上町遺跡・清水台遺跡・角田市郡山遺跡）

- (B) 男瓦は無段式で粘土紐巻き上げ技法、女瓦は凸面に小札痕及び布目痕をもつものがセットになるもの。

（大津廃寺跡）

- (C) 男瓦には粘土板・粘土紐の両技法。

女瓦は粘土板桶巻き技法。この両者がセットとなるもの。

（上人壇廃寺跡）

となり、こういった技法的な相違点はその存在した時期的位置づけを示すものである。宇瓦の場合形式的にはロクロ挽重弧文↓手描重弧文・範ぬき文といった技法的序列をなすものである。手描重弧文と型ぬき重弧文の場合実質的にここでは手描重弧文に対して型ぬき文が先行するものであろう。ロクロ挽き重弧文系の宇瓦について東北地方では石背国の上記遺跡の他、石城国全都で認められ、さらに陸奥国（宮城県内）でも仙台市郡山遺跡・同市大蓮寺瓦窯跡・古川市名生館遺跡・同市伏見廃寺跡等で確認されている。これらの創建年代は七世紀後

半代から八世紀初頭の年代があたえられているため、東北地方では最も古い時期の屋瓦のグループに含まれる。つまり多賀城創建以前に位置づけられるものである。東北地方ではロクロ挽き重弧文系は素弁系・単弁系・複弁系の鎧瓦にそれぞれ組み合わせの関係をもっている。したがってこれらの鎧瓦の様式から素弁系↓単弁系↓複弁系といった形式的段階を考慮しなければならない。複弁系に対して素弁系・単弁系が先行するのが一般的見解であるが、東北地方でもやはり同様であろう。これら三系統の瓦の年代を七世紀後半代〜八世紀初頭頃までとあたえられているわけであるが、複弁系はこれら三系統の瓦の最後になる。したがって一応時期的にも八世紀を前後した時期と考えたい。

手描重弧文字瓦は東北地方ではロクロ挽き重弧文の製作終了後に採用される造瓦技法である。福島県内では上人壇廃寺跡で波文縁複弁蓮花文鎧瓦との組み合わせをもっている。というよりこういった組み合わせは東北地方では上人壇一か所である。手描重弧文字瓦そのものは、関和久遺跡・夏井廃寺跡・郡山五番遺跡・小浜台遺跡・泉廃寺等で出土している。この手描重弧文字瓦がその技法上の特徴から多賀城跡出土、第Ⅰ期の手描き重弧文字瓦と極めて類似するものであることはすでに指摘されているところである。^(註52)つまりこの種の宇瓦の製作時期が多賀城創建時とわめて近い時期にあるということである。

範ぬき宇瓦をセットにもつのは現在の所角田市郡山遺跡一か所のみである。範による製作であるため基本的には重弧文字瓦に先行することはない。しかしロクロ挽き以外の手描重弧文系ということを考慮す

れば必ずしもそうはいきれない。ここで一つ清水台遺跡の場合問題になるのである。清水台遺跡では

第Ⅰ期瓦は麓山瓦窯の八葉単弁蓮花文鎧瓦十ロクロ挽き重弧文字瓦
第Ⅱ期瓦は開成山瓦窯の波文縁六葉蓮花文鎧瓦十宇瓦不明。

第Ⅲ期瓦は愛宕台瓦窯の八葉素弁蓮花文鎧瓦十枝状偏行唐草文字瓦がそれぞれ組みとなる。^(註53)いずれもこれに対する女瓦は粘土板桶巻き作りで初期の段階のものである。期Ⅱの瓦、つまり本稿で取りあげている鎧瓦と組みになる宇瓦がロクロ挽き重弧文なのか、あるいは郡山遺跡例の様な範によるものなのかである。いずれにしても後に触れるがこの時期はロクロ挽き重弧文から範ぬきへの転換期であることは推測できる。

つぎに男瓦・女瓦の場合であるが、東北地方における古期宇瓦と組み合う男瓦は粘土板巻き技法によるもので、女瓦も粘土板桶巻き技法による。そして、両者ともその大きな特徴は凸面がロクロ等を利用したナデ仕上げによるものである。こういった女瓦の特徴は福島県内でも、腰浜廃寺跡、^(註54)清水台遺跡、^(註55)関和久遺跡^(註56)などの調査で確認されている。つまりA群は東北地方における男瓦・女瓦の中で最古式に属する。B群の男瓦は粘土紐巻きあげ技法によるものであるがあくまでも形式的には紐造りに対して板造りが先行するものである。C群の男瓦に板造りと紐造りの両者が存在することもあわせてA群より新しいといえる。B群の女瓦で凸面に布目痕をもった一群の瓦であるが、これらの製作技法をもつ女瓦は飛鳥川原寺跡出土のものがよく知られている。

関東では武蔵影向寺跡・上総光善寺廃寺跡でその例が見られる。この種の女瓦が具体的にどの様な製作法で製作されるものか実証されていないが、この瓦と同種の女瓦を出土する関和久遺跡^(註57)及び生産瓦屋のカニ沢瓦窯跡^(註58)では粘土板合せ目の痕跡ある資料が認められているため少なくとも桶巻き技法に近い技法によるものと考えられる。この瓦が組み合う大津廃寺跡では出土女瓦中二八・三%をしめる^(註59)。関和久遺跡におけるこの種の女瓦は第Ⅰ期の波文縁六葉複弁花文鑑瓦とは生産瓦屋である大岡瓦窯跡での調査から伴わず、この第Ⅰ期に極めて近い時期にあたる(時間的隔たりはさほどない)カニ沢瓦窯跡で生産されたことが明らかになっている。したがって大津廃寺跡では創建に用いられたこの種の瓦は、関和久遺跡では創建期に極めて近いが、この種の鑑瓦とは組み合わせの関係としてとらえることができない。

3

以上が波文縁複弁六葉蓮花文鑑瓦についての製作技法または組み合わせとなる宇瓦・男瓦・女瓦を分析した結果である。次にこれらを総合して再度整理して見ると三形態に分類できる様である。つまりこの鑑瓦は他の瓦類とのセット関係から三グループに伴っていることが明らかにになった。

Ⅰ類 ロクロ挽き重弧文宇瓦、範ぬき重弧文宇瓦、粘土板桶巻き技法女瓦・粘土板巻き技法の男瓦の組み合わせとなる遺跡(関和久遺跡・関和久上町遺跡・借宿廃寺跡・清水台遺跡・角田郡山遺跡・夏井廃寺跡・根岸遺跡等)が属する。

Ⅱ類

ロクロ挽き重弧文宇瓦、凸面に布目をもつ技法の女瓦、粘土紐巻き技法の男瓦の組合せとなる遺跡(大津廃寺跡)がこれに属す。

Ⅲ類

手描重弧文宇瓦、粘土板桶巻き技法の女瓦、粘土板及び粘土紐巻き技法男瓦が組み合せとなる遺跡(上人壇廃寺跡)がこれに属す。

これらの屋瓦群にはその製作年代を八世紀を前後した時期とし、特にその下限は八世紀初頭頃をあたえたものであるが、Ⅰ類と最終末のⅢ類の時間差はさほどに距たりはないものと考えられる。これらⅠ～Ⅲ類の瓦群には一応こういった年代を設定したが、さらにこれらについての背景の一端を検討する。

第Ⅰ類の上限年代であるが、先述のごとくこの鑑瓦と組みになる他の屋瓦群から東北地方での最古式瓦に伴なうことは明瞭である。そしてこれらの古期瓦は素弁系・単弁系・複弁系の三系統鑑瓦の存在中の東北地方に於ける時間的前後関係は素弁系↓単弁系↓複弁系といった製作順序になるのではなからうか。この順序は素弁系あるいは単弁系に伴なう宇瓦にはロクロ挽き重弧のみしか存在しない点にある。しかし波文縁六葉複弁蓮花文鑑瓦と組み合わせる宇瓦にはロクロ挽き重弧文の他、鑑による範ぬき宇瓦・手描重弧文の三者が在る。このことは他の素弁系及び単弁系の鑑瓦には認められないことで、いうなれば、複弁系鑑瓦は他の二系統の鑑瓦よりも時間的に後出のものである。そして東北地方におけるロクロ挽き重弧文になるところの範による宇瓦または手描重弧文などの採用される過渡期に位置するということになる。畿内に於けるロクロ挽き重弧文から範に移行する時期が藤原京

遷都を前後した時期で、七世紀終末頃であるが、東北地方においてもおそらくこの波文縁六葉複弁蓮花文鑑瓦の出現する八世紀を前後した時期であろう。

Ⅱ類の時期についてはロクロ挽き重弧文・粘土板桶巻き技法女瓦といった組み合わせはたしかに古式の要素をもっている。しかし男瓦に粘土紐が用いられることについては少なくとも粘土板造りより先行する

ことはない。畿内における男瓦の粘土紐造りは藤原京造営に伴った造瓦の中で採用されるのがそのはじまりとされるため七世紀終末ということになる。また大津廃寺跡出土の凸面に布目痕のある女瓦も時期を考える目安となる。前述のごとき関和久遺跡でもこの種の女瓦は出土しているがこれらの瓦類は関和久遺跡の創建期に極めて近い後の時期に位置づけられる。従って男瓦の紐造等を考慮すればⅠ類とさほどへだたりのない極めて近い後の時期ということになる。

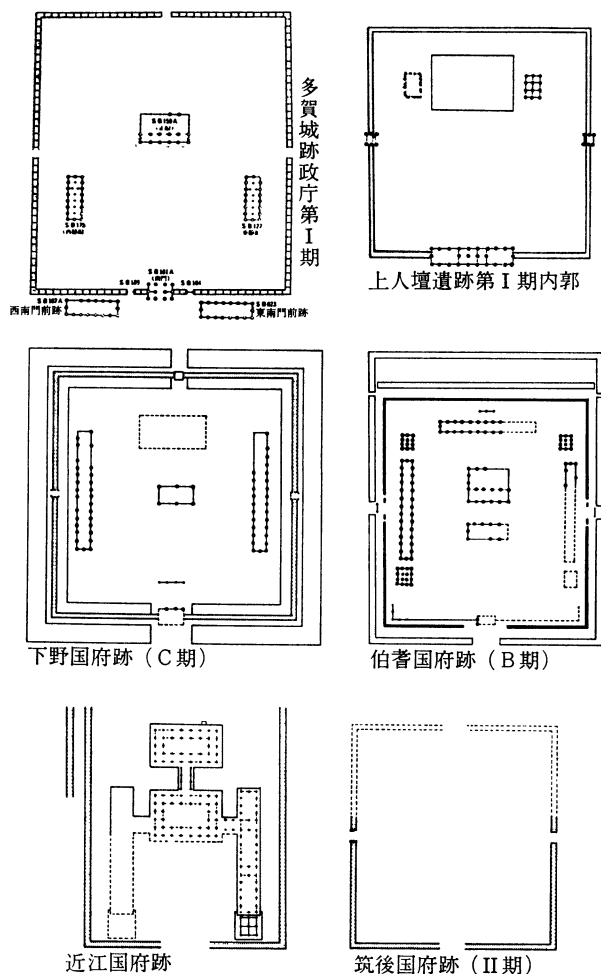


図5 他地域における国府政庁跡

Ⅲ類と組み合わせをなす他の屋瓦類は前にも指摘した様に多賀城跡第Ⅰ期の宇瓦と極めて類似する。しかし以前私はこの問題について指摘したことがあるが、多賀城跡第Ⅰ期瓦群に対して上人壇遺跡創建期の瓦群が技法的に一段階先行するものであると推定できる。多賀城Ⅰ期、つまり創建年代は最近の研究から養老から神龜年間のいずれかと考えられている。あくまでも上人壇廃寺の瓦群と多賀城Ⅰ期瓦群を比較した時やや上人壇が先行するため、時期的にも一応このⅢ類の瓦群に対しては養老年間を前後した、多賀城創建以前という時期をあたえることができる。特にここでのⅢ類の年

代を考える上で上人壇遺跡そのものの性格についての位置づけが問題となってくる。この遺跡については従来古代寺院跡と推定され、現在でも一部の研究者によっては寺院跡と考えられている様である。多賀城跡創建以前における八世紀初頭頃の石背地方での歴史的背景としては、養老二年（七一九）に陸奥国から分離し石背国が設置される時期でもある。幸なことに上人壇遺跡については数回にわたる発掘調査が実施されており、その内容についてはすでに「はじめに」で述べたのであるが、この遺跡は寺院跡ではなく官衙跡のものである。^(註5)そして特にこの様な諸宇の配置形態は国府政庁を想定させる。筆者は以前上人壇廃寺の性格について創建期の建造物群は官衙跡であり、それも養老二年の石背国府に関連した施設であったと推定したことがあるが、^(註63)この考えは今でも変わらない。現在東国では下野国府の調査が比較的進んでおり政庁跡についてもほぼその範囲が確認され遺構の配置も明確になっている様である。^(註64)さらに東北地方では多賀城跡では政庁跡も確認され大きくはIV期の変遷過程が確認されている。^(註65)上人壇遺跡の内郭建造物配置とこれら下野国府I期政庁跡及び多賀城政庁跡第I期を比較するためにその平面図をあげて見た。これらを比較してみると極めてその建物配置は上人壇のものと類似することが解る。多賀城跡政庁に対して下野国府の政庁はやや小規模となる。さらにそのほか最近いくつかの地域で国府政庁域が確認されているが、それらの四至については近江国府で七二×八四メートル以上、伯耆国府A期で六六・五×七三・二メートル、筑後国府で七二×七八（推定）メートルとその

表 3 他地域政庁跡建造物跡との比較

建造物 遺跡名	四 至	正 殿	後殿	前殿	東脇殿	西脇殿	東門	西門	南 門	北門
下野国府	南北 90m 東西 86.4m	規模不明	不明	東西 4×2	南北 4.5m 東西 4.8m	南北 4.5m 東西 4.8m	不明 第Ⅱ期にあり	不明 第Ⅱ期にあり	あ り	あり
多賀城	南北 116.4m 東西 103.1m	5×3 南北 11.8m 東西 19.53m 基 壇	なし	なし	7×2 南北 7.92m 東西 5.66m	7×2 南北 17.9m 東西 5.6m	未確認	未確認	3×2 南北 6.0m 東西 9.8m 八 脚	未確認
上人壇 廃 寺	南北 72m 東西 72m	S B60A 南北 16.65m 東西 26.64m 基 壇	なし	なし	S B20 2×3 南北 5.33m 東西 8 m	あ り (推定)	あり 四脚門	あり	3×2 南北 6 m 東西 9 m 八 脚	不明

『下野国府跡』Ⅱ～Ⅵ栃木県埋蔵文化財調査報告昭和55～60年

『多賀城跡』政庁跡本文編宮城県教育委員会昭和57年による。

確認結果が報告されている。これらの数値はいずれも七〇メートル前後から九〇メートル前後までの規模が一般的であり多賀城跡のみが一〇〇メートルを越えるものである(表3)。

おそらくこういった規模の大小は国の等級によって異なる数字と考える。こういった他の国府政庁と上人壇遺跡の内郭の遺構配置及び規模等を比較した時極めて類似することがわかる。石背国府論については時期をあらためて論じることとするが、以上の様な点から一応上人壇遺跡を養老二年設置の石背国府と推定する。時期的にも内郭内出土の土師器及び須恵器等の年代は大むね八世紀初頭頃に位置づけられることもこれと符合する。

以上の様な理由からⅢ類の瓦群の製作年代を養老二年頃と推定するものである。

4

最後に東北地方における波文縁六葉複弁蓮花文鑑瓦についてどの様な位置づけができるのか他の組み合わせから考察してみた。その結果次の様なことが推定できた。東北地方では古期屋瓦の系譜に素弁系・単弁系・そして複弁系とおおむね三系統の鑑瓦が存在する。そして古期古瓦についてⅠ期(素弁系)Ⅱ期(単弁系)Ⅲ期(複弁系)と分類した場合、複弁系はⅢ期に属するものであり、その最終末期の年代を一応八世紀を前後した時期と考えた。最終末期と考えた波文縁蓮花文鑑瓦はさらにⅢ類に分類できた。そのⅠ・Ⅱ・Ⅲ類瓦群の上限は七世紀末期、八世紀初頭にかけて位置づけられ、この時期は東北地方に於ける宇瓦

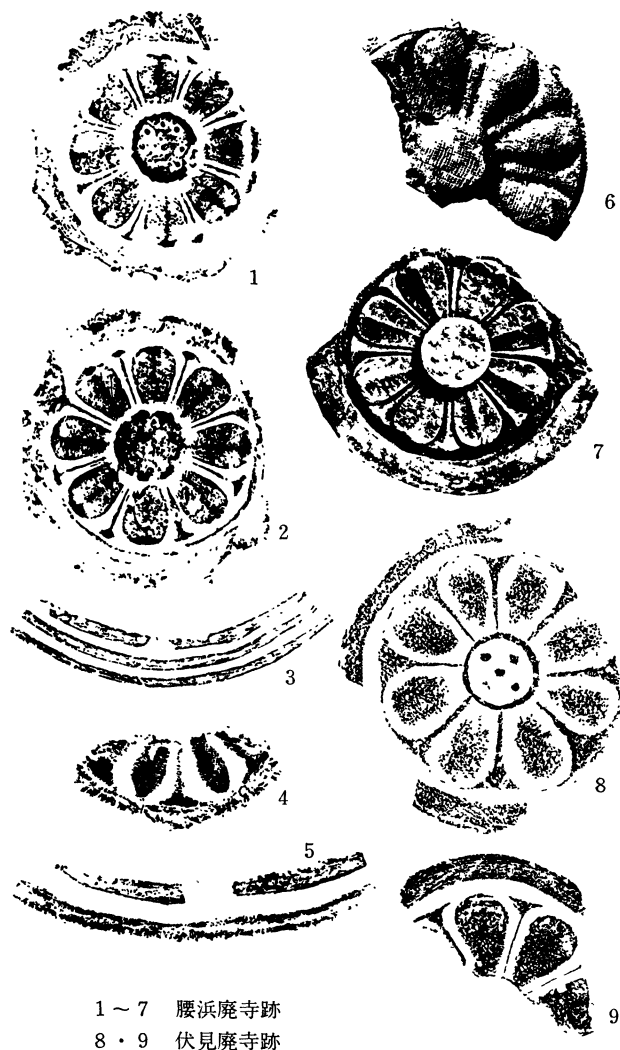
にも、ロクロ挽き重弧文から範ぬきによる重弧文字瓦の転換期でもある。Ⅲ期の波文縁六葉複弁蓮花文鑑瓦は上人壇遺跡のものである。この瓦はⅢ類の最終末期になるもので、この時期より宇瓦にはじめて手描重弧文が採用される。上人壇遺跡内郭を養老二年設置の石背国府政庁と考えたので、これらⅢ類の瓦群は養老二年頃に位置づけられよう。以上石背地方を中心に北は角田市郡山遺跡、南は北茨城市大津廃寺跡までの東北地方南部に分布する波文縁六葉複弁蓮花文鑑瓦について述べたが、その上限は七世紀末、その下限は養老二年までの鑑瓦文様であったと推定するものである。

(三) 素弁系蓮花文鑑瓦

1

この種の鑑瓦は石背地方では腰浜廃寺跡の創建期瓦に二種認められ、その他の地域では宮城県古川市伏見廃寺跡でも二種の出土がある。腰浜廃寺跡出土のうち、一点の八葉素弁蓮花文鑑瓦についてはすでに昭和九年石田茂作博士によって白鳳時代に位置づけられているが、その後長い間多賀城跡創建以後のものであるとされて来た。一方伏見廃寺跡出土の八葉素弁蓮花文鑑瓦については佐々木茂楨氏によって報告されたものである。氏はこの瓦の報告の中で畿内の要素をもった白鳳期の代表的な形式・製法と相通ずるものを有すると指摘されている。これら四点の鑑瓦は同じ素弁系であるが瓦当文様は異なったものである。腰浜廃寺跡出土の鑑瓦は、その一種が全体的に彫の深い八葉素弁蓮花

で、花卉はやや細目で弁端は丸味をおび、鋭く反転する。弁には陵線をもつ。中房は凸出し一十八の蓮子を配したものである。鋭く陵をもった間弁は中房と連結し端部は反転する。さらに一種は同じ八葉素弁蓮花文ではあるが、瓦当面には全体に布目の痕跡が認められる。弁端は丸味をおびた反転しない花卉である。現状での花卉はかなり彫りの



1～7 腰浜廃寺跡
8・9 伏見廃寺跡

図6 素弁系鍔瓦

深いものであるため、筈はさらに深い彫りのものであると推定できる。したがって筈からの剝離を容易にするため瓦当面に布を使用したものであろうか。いずれにしてもこの二点の鍔瓦はまったく異なった素弁系の鍔瓦である。腰浜廃寺跡調査の結果素弁系鍔瓦はロクロ挽き重弧文系宇瓦、粘土板桶巻き技法による女瓦、粘土板巻き技法の男瓦が一組みをなす。

一方、伏見廃寺跡出土の素弁系鍔瓦は、その一種が発掘調査によって出土し、もう一種は表面採集されたものである。伏見廃寺跡は多賀城跡の北西約三五キロ、大崎平野の宮城県古川市大崎字伏見要害にある。荒雄川の西岸で北東方向にのびる台地上に営まれた古代の寺院跡で、近隣地域には北約一キロに名生館遺跡、南西約五キロに菜切谷廃寺跡・城生遺跡、そしてこれらの遺跡を鳴瀬川で隔てて、一の関遺跡及び日の出山瓦窯跡が営まれている。これらの遺跡はすべて古瓦出土遺跡である。伏見廃寺跡の発掘調査は昭和四十五年三月に実施され、東西十七・六メートル、南北九・五メートルの有礎建造物

基壇が確認された。出土瓦二点ともに素弁系の鑑瓦であるが瓦当文様は若干異なる。発掘調査によって出土した鑑瓦(図6の8)は周縁を約半分程欠くがほぼ完形に近い。凸帯で中房は区画され1+4顆の蓮子を置く。花卉はやや扁平で弁端は丸味をおびるが反転はしない。また陵線及び珠文もない。瓦当裏面男瓦との接合は印籠つぎ技法による。(図6の9)は発掘調査以外で表面採集されたものである。全体の三分の一程しか存在しないが八葉素弁蓮花文鑑瓦である。中房は欠けてないが花卉の影は深く、弁端は丸味をおび細い陵線をもつ。周縁はやや広く素文である。間弁は鋭い凸線による。これらの鑑瓦と組み合わせをなすクロ挽き重弧文系宇瓦、女瓦は粘土板桶巻き技法によるものと粘土板巻き上げ技法による男瓦である。伏見廃寺跡の性格については名生館遺跡、つまり推定玉造柵附属寺院跡と考えられている。

2

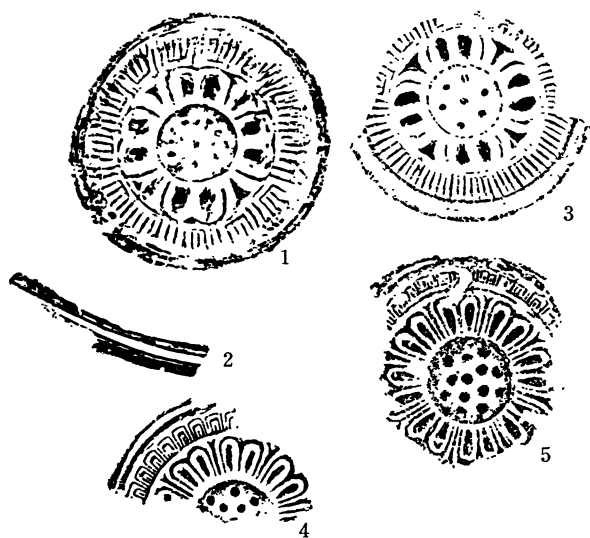
以上腰浜廃寺及び伏見廃寺跡出土の四種類の素弁系鑑瓦について概説した。

かつて腰浜廃寺跡出土のこの鑑瓦については創建期の瓦ではあるが調査者は八世紀後半代に位置づけられたものであった。^(註69)しかし後にこの瓦の製作年代についてはやはり調査担当者である伊東信雄博士によって修正され、さらにはこの鑑瓦についての歴史的位置づけもなされた。^(註70)歴史的位置づけとは次の様なものである。腰浜廃寺跡出土瓦と極めて類似する瓦として、広島県寺町廃寺跡出土の八葉素弁蓮花文水切鑑瓦の類例をあげ、この種の蓮花文様は百濟末期の文様で日本では大

化改新を前後して多く流行したものであり、特にこの時期の金銅仏台座の蓮花文様として見られる。また寺町廃寺跡は『日本霊異記』に記載された備後国三谷寺と推定される。三谷寺は三谷郡大領によって、百濟救援による帰国誓願の寺院である。無事帰国することになるが、この時百濟の僧弘濟禪師を伴って帰国し、この僧に寺院を建立させたものといわれる。百濟救援は斉明天皇七年(六六二)~天智天皇二年(六六三)であるため少なくとも三谷寺の創建は天智天皇の時期頃である。さらに腰浜廃寺跡供給瓦窯跡である宮沢瓦窯跡出土の須恵器の年代より推定され、一応七世紀後半代とされたものである。つまり東北地方における最も古い時代の鑑瓦として位置づけられたものである。一方伏見廃寺跡出土の八葉素弁蓮花文鑑瓦で発掘調査によって出土した鑑瓦はおよそ関東・東北地方では類例の認められないものである。もしこれを畿内及びその周辺に求めるとすれば四天王寺跡・新堂廃寺跡・秦原廃寺跡等の鑑瓦文様と若干類するが同一のものではない。しかしこれらの瓦当文様のもつ飛鳥時代末期から奈良時代前期にかけての特徴を備えたものである。また表面採集資料の鑑瓦は全体の約三分の一程の断片であり、かつ一点しか確認されていない。周縁は素縁で花卉は素弁八葉となる。弁端は中央に陵を立てる。間弁も鋭い凸線による。この鑑瓦当文様は奈良法輪寺創建瓦とほぼ同範関係にある。かつて佐々木茂楨氏はこの鑑瓦をもって畿内の文様及び技法の特徴を備えており、一見して大和法輪寺の創建瓦と見間違えうばかりであると報告している。^(註71)

(四) 雷文縁複弁蓮花文鑑瓦

1



1・2 山口瓦窯跡 3 菜切谷廃寺跡・関遺跡・土器坂窯跡
4・5 上総二日市場廃寺跡

図7 雷文縁系鑑瓦

雷文縁蓮花文鑑瓦は東北地方では会津で一か所、大崎地方で三か所、計四か所で認められている。会津での出土例は山口瓦窯跡での生産瓦に認められる。この瓦窯跡での生産瓦をどこに供給したか明らかでないが、瓦当文様は比較的大型の中房に1+6顆の蓮子を配し、花卉は

複弁四葉で外区には規則的に十三個の雷文様が連結して施文されている。瓦当裏面での男瓦との接合法は印籠つぎ技法によるものである。

北部の大崎地方では一の関遺跡及び菜切谷廃寺跡、そしてこれらの遺跡に供給した土器坂窯跡^(註72)にその類例が認められる。菜切谷及び一の関出土の瓦当文は中房が大型で1+6顆の蓮子と四弁の花卉及び外区の雷文の配置など極めて山口瓦窯跡出土の瓦当文様と類似する。そして技法的にも印籠つぎ技法といった同一技法による。しかし瓦当文様をよく観察してみるとこれら二点の鑑瓦は異なった範による製作であることが解る。特にその大きな特徴は外区の雷文の配置にある。山口瓦窯跡の雷文はほぼ規則的に十三個連結したものであるのに対し、一の関、菜切谷の雷文は十一個をやや不規則に連結して配置したものである。またこれらの鑑瓦に伴う他の屋瓦類については山口瓦窯跡では宇瓦はクロ回転利用の単弧文・女瓦は粘土板桶巻き技法、無段式の粘土板巻き技法による男瓦が一組となる。一方一の関遺跡、菜切谷廃寺跡及び土器坂窯跡では、宇瓦が不明であるが、女瓦は粘土板桶巻き技法、男瓦も粘土板巻き技法のものである。

2

東北地方における雷文縁鑑瓦二種であるがこの種の雷文縁鑑瓦は畿内では紀寺系といわれる瓦当文様で大和、河内、山城を中心として分布し北陸及び関東地方にも一部に分布する。これらの瓦当文様と東北地方の瓦当文様を比較した時、はるかに東北地方のものが退化した文様である。この種の鑑瓦で東北地方に近い地域に類例を求めると千葉

県山武郡成東町所在の真行寺廃寺跡、^(註73) 市原市二日市場廃寺跡出土の鑑瓦がある。これら上総における二寺院跡出土の雷文縁鑑瓦の文様は東北地方出土のものと比較した時、両者に共通する点は外区に雷文が施文されているということだけで、雷文の形態及び配置、または花卉の数などまったく異なったものである。上総国出土の鑑瓦が八葉複弁蓮花文に対し東北地方のものは四葉複弁蓮花文であり、真行寺廃寺跡、二日市場廃寺跡出土の瓦当文様を紀寺跡出土鑑瓦瓦当文様と比較した時、花卉の配置や中房内蓮子（1+5+9顆）、雷文の形態及び配置、あるいは瓦当面の彫の深浅など、極めて紀寺の瓦当文様に近いことが解る。真行寺廃寺跡及び二日市場廃寺跡の瓦当面外区外縁の重圈文を真行寺廃寺跡では素文に改造して瓦範を再使用したものと考えられている。^(註75) また他の屋瓦との組合せについては真行寺廃寺跡では創建瓦の男瓦は粘土板巻き技法・女瓦では粘土板桶巻き技法・宇瓦はロクロ挽き重弧文となっている。鑑瓦の技法はともに印籠つぎ技法である。

3

つぎにこれら東北地方及び上総に於ける雷文縁複弁蓮花文鑑瓦の製作年代についてはこの種の瓦当文様は前述のごとく紀寺系とも呼ばれているもので、大和・河内・山城・畿内を中心として山陰・北陸・中部地域に広くその分布をみる。そこで、まずその祖形と思われる畿内紀寺の創建については、これを確定できる資料はないが、続日本紀、天平宝字八年七月十二日条に、天智天皇九年（六七〇年）時のこととして、紀寺で何らかの造営工事が行なわれていたことを推測できる記

事がある。この記事をもつて紀寺の建立を考えた場合少なくとも天智天皇の時期にはすでにその存在が推測できる。つまり天智から天武天皇の時期頃の創建と推定される川原寺と極めて近い時期に紀寺の創建が推定され、雷文縁鑑瓦もこの頃にその上限年代を置くことができる。さらに畿内におけるこの種の瓦の下限年代は葛上廃寺跡・大宅廃寺跡・北白川廃寺跡出土の鑑瓦で七世紀末頃に位置づけられる。東北地方出土の鑑瓦は別としても上総国の二寺院跡出土の雷文鑑瓦とこれら畿内の雷文鑑瓦を比較した場合、中房の大きさ及び蓮子の配置など瓦当文様全体から判断してこれら二寺院跡の瓦文様がもっとも紀寺跡出土の瓦当文様に近いと思われる。したがってこれら上総の二寺院跡出土の瓦の年代は紀寺よりも先行することはなく大宅廃寺、北白川廃寺跡とほぼ同時期かまたはそれ以前に推定できる。

一方、東北地方の雷文鑑瓦については直接紀寺の雷文鑑瓦と比較した場合花卉は四弁で、雷文様も長く逆配置で連結する数も少ない。こういった点を考慮してこれらの変形化したものとしてとらえるべきであろう。共通する点は重弧文宇瓦と組み合う関係にあることのみで、時期的には上総の二寺院跡出土のものを含めたこれらの紀寺系瓦の最終末の時期として位置づけられるものであろう。山口瓦窯跡出土の鑑瓦の場合、東北地方のセット関係では比較的古い時期に位置づけられる粘土板桶巻き技法の女瓦、粘土板巻き技法の男瓦そして重弧文宇瓦などが伴っている。しかし宇瓦の場合ヘラ仕上げ重弧文という事は、回転を利用した点を考慮してもロクロ挽き重弧文に先行することはな

い。石背地方のヘラ描き重弧文は上人壇廃寺跡の宇瓦が古い時期のものと考えられる。しかし技法的にはこれより後になるとは考えられず、やや先行するものと思われる。したがって山口瓦窯跡の雷文鑑瓦の生産年代は八世紀初頭で、波文縁蓮花文鑑瓦^(註76)Ⅲ期の時期、つまり上人壇廃寺跡の創建時よりも早い時期と推定したい。

一の関遺跡・菜切谷廃寺跡出土の鑑瓦^(註77)当文の場合山口瓦窯跡出土の瓦当文様と比較した時、大崎地方出土の瓦窯跡を除く二遺跡の文様は、山口瓦窯跡出土の文様が忠実に規則的な配置を展開するのに対して後者は、その文様に若干の乱れが生じるため形式的には山口瓦窯跡の瓦が先行してその影響下に大崎地方の雷文鑑瓦が成立したものであるうとかつて進藤秋輝氏が指摘した^(註78)。その後、一の関遺跡・菜切谷廃寺跡の二遺跡に供給した土器坂瓦窯跡が同地域より確認され雷文縁四葉複弁蓮花文鑑瓦と組み合せ関係にある他の瓦が確認された^(註79)。報告によると宇瓦は確認できてないが、粘土板桶巻き技法の女瓦と粘土板巻き技法の男瓦が確認されておりその製作年代は山口瓦窯跡出土のセット関係にある瓦と同一技法にあるため、直接的に瓦当文様が土器坂窯跡に移入されたものと推定し^(註80)、多賀城創建期以前に位置づけられる可能性が強いと指摘されている。確かに土器坂窯跡出土の組み合せになる瓦は、男瓦・女瓦のロクロ利用回転のナデ仕上げなど多賀城創建以前の東北地方における瓦の製作技法である点については私も同一意見である。また宇瓦は確認されていないがロクロ挽き重弧文系の宇瓦であった可能性は強い。

以上、東北地方及び関東地方出土の雷文縁蓮花文鑑瓦について述べた。雷文縁系鑑瓦文様はその祖形を大和紀寺の創建期瓦に求めることができる。紀寺の創建は川原寺と極めて近い時期で天智天皇の時期（六六二～六七一年頃）頃に推定できる。上総国における二日市場廃寺跡・真行寺廃寺跡出土の鑑瓦は紀寺系の鑑瓦文様と比較して、大和・山城・河内・近江・越前などの地域に分布するものの中でも極めて紀寺の創建瓦に近いと考えられ、時期的には七世紀後半頃と推定できる。上総国の二寺院における紀寺の鑑瓦文様がそのままの文様として踏襲されたのに対し、東北地方ではこの文様がまったくの変形化した形で採用される。これは時期的関係を示すものであろう。最もその大きな点は複弁八葉蓮花文に対して、四葉複弁蓮花文といった形態を取るものであるが、東北地方では古式形態をもつ瓦類と組み合せ関係があり、多賀城創建以前に位置づけられる。一応ここでは東北地方における雷文縁四葉複弁蓮花文鑑瓦の年代を八世紀初頭頃に考えるが、鑑瓦の四葉複弁蓮花文の類例は根岸遺跡・夏井廃寺跡^(註81)などにあり、関東では九十九坊廃寺・大椎廃寺跡・上総光善寺廃寺跡^(註82)で創建期の瓦に認められ重弧文字瓦とセット関係にあって八世紀初頭頃に位置づけられる。こういった例からも四葉複弁蓮花文鑑瓦を八世紀初頭に位置づけることは不自然ではない。最後に以上の点から東北地方における雷文縁四葉複弁蓮花文鑑瓦の時期については八世紀初頭の上人壇廃寺跡創建以前の極めて近い時期に考えたい。

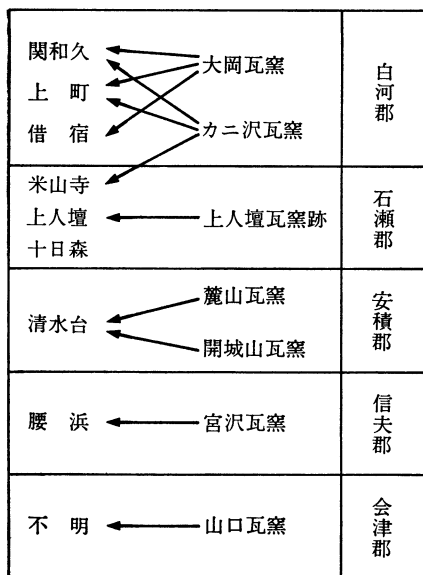
二 石背五郡古期屋瓦の需給関係

以上石背地方に於ける初期の瓦について見て来た。養老二年にこの地域は石城国と同様石背国が設置され数年でまた陸奥国にもどされることは先にも述べた所である。ここで扱かって来た古瓦を古期古瓦として考えて来たが、この古期古瓦とは、東北地方に於ける歴史的位置づけから見た場合、多賀城跡創建時以前の屋瓦として捕えられるもので、古代石背国設立時に置かれた五郡の中で創建期の瓦として存在した屋瓦ということである。古代石背地方では前述の古瓦出土遺跡の他に、流麿堂跡・安藤遺跡・小幡遺跡・郡山台遺跡・西原麿寺跡・観音寺麿寺跡などその他にも数カ所の例が認められる。しかし、これらの古瓦は技法及びその他の点からその上限は八世紀中葉以降の造瓦で多賀城跡創建以降のものとしてあつかわなければならない瓦である。神亀五年にはすでに石背国は陸奥国にもどるが、その後白河・岩瀬・安積・会津・信夫の石背五郡に加えて郡の数が増す。承和七年三月庚寅条に見られる会津郡から分割された耶麻郡（続日本後紀）、『延喜式』卷二二民部式の頭注による「延喜六年（九〇六）正月廿日分三安積郡一置「安達郡」といった安積郡北部を割いての安達郡の設置、和名抄の信夫郡三郷を割いての伊達郡の設置など平安時代に入ってから新たに設置される郡もある。こういった新設の郡内において古瓦出土遺跡は多く確認できるが時期的には、すべてその上限を遡ぼらせても八世紀

後半代以降のものである。こういった点からやはり石背地方に於ける古期造瓦は国府並びに石背五郡の郡衙及びその附属寺院を中心として展開されているといえよう。

石背五郡の古期の瓦については国府あるいは郡衙、そしてその附属寺院の創建期の瓦として生産されたものであり、これら五郡の需給関係は表4の図式となる。白河郡では、大岡瓦窯跡とカニ沢瓦窯跡が創建期の瓦を生産している。関和久遺跡での調査結果では特に女瓦の出土量から大岡瓦窯跡生産品が八三％、カニ沢瓦窯跡での生産品が十一％となり、全体の出土量の九四％はこの二瓦窯跡での生産品と判明した。ただカニ沢瓦窯跡の場合創建期とはいっても借宿麿寺跡には供給されず、いくぶんか後の時期になるものと思われる。窯構造は大岡瓦

表4 石背五郡創建時屋瓦需給関係図



窯跡は地下式無階無段登窯と地下式ロスト登窯の二種が確認されている。^(註84)カニ沢瓦窯跡の場合、二基以上の存在が考えられ調査された一基の窯跡は半地下式無階無段登窯である。^(註85)これらの瓦窯跡は郡内に築窯されるが、大岡瓦窯跡の場合郡衙及び附属寺院の専用瓦窯であるのに対し、カニ沢窯では郡を越えた石瀬郡の米山寺にも供給している。石瀬郡の場合、十日森遺跡では不明であるが、上人壇廃寺ではほぼ全体の90%以上、上人壇瓦窯跡より供給される。上人壇瓦窯と米山寺の場合明瞭でないが、米山寺では白河郡のカニ沢瓦窯から創建期に供給を受けている。上人壇瓦窯跡の構造は地下式無階無段登窯である。安積郡の場合古式の瓦は二種あり、これらの生産瓦屋は異なる。単弁八葉蓮花文鑑瓦・ロクロ挽き重弧文字瓦の組み合わせは麓山瓦窯跡で、複合波文縁六葉複弁蓮花文鑑瓦は開成山瓦窯跡でそれぞれ生産されたものである。二瓦窯跡の安積郡衙跡からの距離は麓山で一キロ、開成山で二キロ。開成山は未調査であるが、麓山瓦窯跡は合計五基調査、うち一基は須恵器専用窯で残りが瓦窯とされている。^(註86)窯構造は地下式無階無段登窯である。信夫郡の場合、腰浜廃寺跡の創建期瓦には鑑瓦に三種あるがこのうちの一種である文様面に布の痕跡ある鑑瓦とロクロ挽き単弧文字瓦を生産した瓦窯跡が確認され他は不明。この瓦窯跡は宮沢瓦窯跡であるが合計五基確認され、瓦陶兼用窯で地下式無階無段登窯である。会津郡の場合瓦窯跡は確認されているもののその供給先が現在の所明瞭でない。おそらく他郡の例から郡衙及び付属寺院に供給したものであろう。窯跡は合計五基確認されており二基が地下式の有

段ロストル式登窯で他は地下式無階無段登窯である。以上が石背五郡の生産瓦屋である。

三 石背五郡古期鑑瓦の製作技法

次に鑑瓦の製作技法を観察すると石背五郡の古期瓦には次の五種類の技法が認められる。

第Ⅰ技法：男瓦円筒広端部を外区周縁としこの内側に内区部分をはめこむ。

第Ⅱ技法：いわゆる一本造り技法といわれるもので瓦当裏面には布しぼり庄痕の認められるもの。

第Ⅲ技法：男瓦広端部を瓦当面上半部の周縁として下半部は瓦当面内区と同時製作するもの。

第Ⅳ技法：いわゆる接着法に近い技法をもつもの。

第Ⅴ技法：いわゆる印籠つぎといわれる技法のもの。

第Ⅰ技法をもつ鑑瓦は腰浜廃寺跡八葉素弁蓮花文鑑瓦一〇〇・一〇一の二種に行なわれる技法である。生産瓦窯は現在の所不明であるが他の屋瓦群はロクロ挽き重弧文・単弧文字瓦・粘土板桶巻き技法女瓦・粘土板巻き技法男瓦である。この技法は創建期に採用され、さらに同寺における平安時代の施回花文鑑瓦(三二一)、三蕊弁四葉花文鑑瓦二類(三四一)の技法としても採用されるため腰浜の創建から終末までの主流的技法といえよう。またこの技法は奈良末から平安時代に

かけて腰浜廃寺のさらに北部地域においても徳江観音寺跡など、あるいは浜通り地方に於ける植松廃寺跡を代表とする北部地域でも多く導入される技法の一つである。^(註87)同範瓦あるいは同種の瓦当文様など腰浜廃寺の影響のもとに成立したものと考える。

第II技法は腰浜廃寺跡出土の瓦当面に布目の痕跡ある八葉素弁蓮花

文鏡瓦II類の技法である。生産瓦窯は宮沢瓦窯跡であるが、ここでの組み合わせはロクロ挽き単弧文宇瓦、粘土板桶巻き技法女瓦、粘土板巻き技法男瓦となっている。この技法は腰浜廃寺では創建期にのみ存在し、他の屋瓦類との組み合わせ関係から様式的には第I技法に先行する。宮沢瓦窯跡での須恵器との共存関係等から一応七世紀後半代に位置す

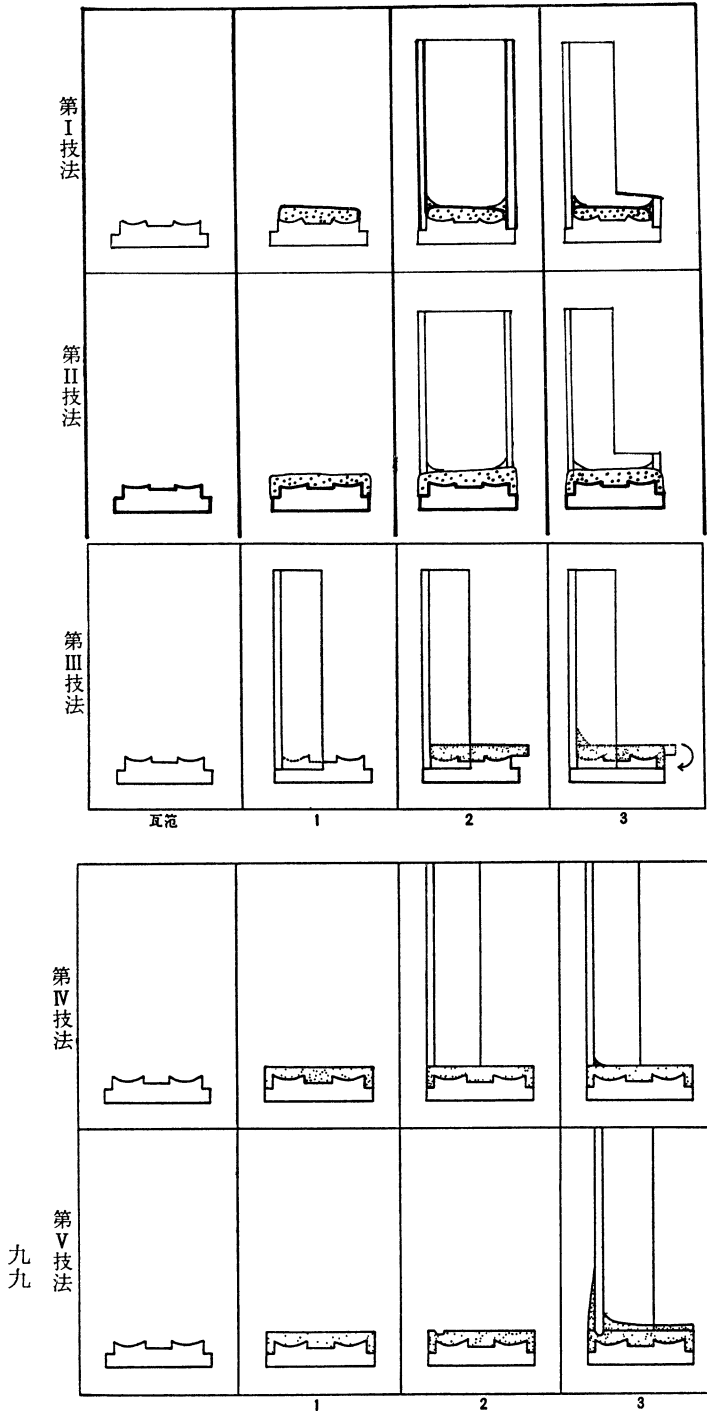


図8 鏡瓦製作技法模式図

表5 石背四郡における第Ⅴ技法の鑑瓦

郡名	遺跡名	組み合わせ関係	生産瓦窯跡
白河	上町遺跡 関和久遺跡 借宿廃寺跡 (白河郡衙跡)	複合波文縁六葉蓮花文鑑瓦 ロクロ挽重弧文字瓦 粘土板桶巻き女瓦 粘土板巻き男瓦	大岡瓦窯跡
石瀬	上人壇廃寺跡 (推定石背国府跡)	波文縁六葉複弁蓮花文鑑瓦 手描重弧文字瓦 粘土板桶巻き女瓦 粘土板巻き男瓦 粘土紐巻き男瓦	上人壇瓦窯跡
安積	清水台遺跡 (推定安積郡衙跡)	八葉単弁蓮花文鑑瓦 ロクロ挽き重弧文字瓦 粘土板桶巻き女瓦 粘土板巻き男瓦	麓山瓦窯跡
会津	不明	雷文縁複弁四葉鑑瓦 ロクロ回転利用単弧文字瓦 粘土板桶巻き女瓦 粘土板巻き男瓦	山口瓦窯跡

第Ⅴ技法は県内はもとより東北地方において最も多く採用される技法である。とくに県内では信夫郡を除いた石背国四郡で採用されている。この技法による各郡内での瓦類の組み合わせは表5のごとくで県内

けられるもので石背地方では最古の鑑瓦と考えられる。初期の段階ではこの技法は腰浜廃寺跡にしか現在の所認められないが、新しい時期になると腰浜廃寺の置かれた信夫郡以外でも一本造りは行なわれる。石瀬郡では国造遺跡及び上人壇廃寺の補修用瓦、白河郡流廃堂跡さらに石城夏井廃寺跡で見られる。これはいずれも奈良時代末期から平安時代にかけての時期のものであるが、腰浜廃寺跡創建のこの技法は、瓦当裏面に布しぼり圧痕を残すのを特徴とするが、それ以外のものはこれとは若干異なり、L字状の布とじめ等の痕跡があるなど細部にわたっては、なお検討しなければならない。

第Ⅲ技法は推定安積郡衙跡の鑑瓦で麓山瓦窯での生産である。鑑瓦瓦当面が男瓦接合部で剝離しているため文様については明らかでない。麓山瓦窯跡ではロクロ挽き重弧文字瓦・粘土板桶巻き技法女瓦・粘土板巻き男瓦と組み合わせになる。この技法は八世紀末から九世紀前半代にかけて原田瓦窯跡生産の推定安積郡衙跡補修用瓦(清水台鑑瓦Ⅵ類)にも採用される。現在のところ安積郡にのみ認められる技法である。

第Ⅳ技法は清水台遺跡出土の複合波文縁複弁蓮花文鑑瓦がこの技法をもつ。県内では同時期頃に石城地方でこれに類した技法が採用され、石城地方南部地域でこの技法からの流れをくむ技法が展開する。また東北地方ではこの技法というより、むしろ接着技法そのものといった方が妥当かと考えられるが宮城県古川市所在の伏見廃寺跡出土の八葉素弁蓮花文鑑瓦に認められる。この鑑瓦は佐々木茂楨氏の見解による(註89)ならば大和法輪寺出土の創建期瓦と同範関係にあるとされている。(註90)

では最も多く採用される技法である。この表で見て明瞭なことは一部麓山瓦窯跡出土の八葉単弁蓮花文鑑瓦にも採用されるが、特に複弁系の鑑瓦文様に多く採用されていることが解る。つまり石背地方の古期の鑑瓦技法では第Ⅴ技法の印籠つぎ技法が主流をしめるということである。そしてこの技法は上記の遺跡では以後一部異なった技法が補修瓦等に採用されているが、基本的には終始一貫印籠つぎ技法が主流の技法である。以上が石背五郡の古期造瓦技法である。

むすび

以上石背五郡に於ける古期屋瓦を古代東北地方の中でとらえて来た。ここでいう古期瓦とは多賀城創建以前の屋瓦を指すものである。つまり養老二年石城国とともに石背国が設置されるがこの時点での石背五郡ではすでに造瓦が行なわれていたということである。そしてこれらの屋瓦は国府・郡衙、附属寺院に使用されたものである。これら古期の屋瓦には鑑瓦文様として素弁系・単弁系・複弁系の大むね三系統の瓦当文様が存在し様式的には素弁系が最も古く単弁系・複弁系といった型式変化をたどるものと考ええる。

素弁系瓦当文様は石背地方最北端の信夫郡の腰浜廃寺跡で採用される鑑瓦文様であり、陸奥国ではさらに北部地域の大崎地方の伏見廃寺跡にも認められる。これらの素弁系鑑瓦はいずれも他の屋瓦類との組み合わせから七世紀代に位置づけられる。また単弁系瓦当文様は石背地

方では安積郡衙跡で採用され陸奥国ではさらに大崎地方の名生館遺跡・伏見廃寺跡でも認められる。ともに他の屋瓦類の組み合わせより七世紀代にその中心を置けるものであろう。複弁系では波文縁六葉複弁蓮花文鑑瓦と雷文縁四葉複弁蓮花文鑑瓦の二種である。前者の波文縁蓮花文系は陸奥南部地域の阿武隈川南岸まで認められ石背地方を中心として展開し大崎地方には認められない鑑瓦文様である。石背五郡中、信夫・会津を除いた三郡で採用される鑑瓦文様である。この鑑瓦文様と組み合さる他の屋瓦類では重弧文字瓦に箆を用い、男瓦は板造り、紐造りの両者が認められるなど、素弁系及び単弁系鑑瓦文様と組み合さる屋瓦類と比較した場合時間的にこれらの後の段階に位置づけられるものであろう。そして会津郡及び大崎地方の雷文縁四葉複弁蓮花文鑑瓦もやはり波文縁複弁蓮花文鑑瓦の中の素弁系と単弁系の時期的関係は、素弁系で最古の鑑瓦が伏見廃寺跡出土とされ、大和法輪寺八葉素弁蓮花文と同範関係にある。この鑑瓦は技法的にも法輪寺瓦と同一技法によるものである。次の段階に伏見廃寺跡及び腰浜廃寺跡の八葉素弁蓮花文鑑瓦を位置づけることができる。これら両者の前後関係については明瞭でないが特に腰浜では供給元の宮沢瓦窯跡での伴出須恵器から七世紀後半代に位置づけられるものである。また腰浜廃寺跡の素弁蓮花文鑑瓦に対し、麓山瓦窯跡出土の単弁蓮花文鑑瓦はその伴出須恵器及び宇瓦から考えてやや後の時期七世紀の末期頃に推定できる。さらにこの後に複弁系文様が展開されこの複弁系はその終末期が上人壇廃寺跡創建期に位置づけられるものと考ええる。いずれにせよこ

れら三系統の瓦は養老二年石背国設置段階において石背五郡ではすでに屋瓦が存在していたと考えるのである。

表 6 石背五郡における古期瓦の組み合わせ

瓦 郡	鑑 瓦	鑑瓦 技法	組 み 合 せ 関 係			遺跡名
			字 瓦	男 瓦	女 瓦	
白 河	複合波文縁六葉複弁蓮花文鑑瓦	第Ⅴ	ロクロ挽き文重弧	板 造	桶板 巻造	関久和町宿上借
石 瀬	波文縁六葉複弁蓮花文鑑瓦	〃	手重弧	描文板紐	造 桶板 巻造	上人壇
安 積	単弁八葉蓮花文鑑瓦 波文縁六葉複弁蓮花文鑑瓦 瓦当文様不明鑑瓦	第Ⅳ	ロクロ挽き文重弧	板 造	桶板 巻造	清水台
		第Ⅲ	不 明 ロクロ挽き文重弧	板 造	桶板 巻造	
信 夫	八葉素弁蓮花文鑑瓦 〃	第Ⅰ 第Ⅱ	ロクロ挽き文重弧	板 造	桶板 巻造	腰 浜
会 津	雷文縁四葉複弁蓮花文鑑瓦	第Ⅴ	ロクロ回転文重弧	板 造	桶板 巻造	山口瓦窯跡

表 7 石背五郡及び大崎地方の古期鑑瓦技法

年代 技法	7C	8C	9C
第Ⅰ技法	腰浜(信夫)		腰浜(信夫) 植松(行方) 観音寺(伊達)
第Ⅱ技法	腰浜(信夫)		国造 上人壇(石瀬)
第Ⅲ技法	清水台(安積)		清水台(安積)
第Ⅳ技法	伏見廃寺	清水台(安積)	
第Ⅴ技法	上町遺跡・関和久遺跡・借宿廃寺跡(白河)	上人壇(石瀬)・清水台(安積)・山口瓦窯(会津)	

次に鑑瓦の製作技法についてであるが、一応大崎地方をも含めた石背五郡では創建期瓦に五種の技法が存在する。この中で最古と考える素弁系の鑑瓦はいずれも異なった技法による。腰浜廃寺跡の第Ⅰ技法(はめこみ式)及び第Ⅱ技法(一本造り)に対し伏見廃寺跡では第Ⅳ技法(接着技法)と第Ⅴ技法(印籠つぎ技法)が行なわれている。このうち第Ⅳ技法が最っとも古い技法である。この鑑瓦は大和法輪寺瓦と同範関係のみならず、技法的にも男瓦先端部縁を半分斜めに切落し(面取り)ての接着技法は法輪寺瓦と同一技法のものである。これに対し伏見廃寺跡のもう一種はまったく異なった印籠つぎ技法による。あきらかに同遺跡出土瓦の時期的へだたりを示すものである。伏見廃

寺跡の法輪寺同範瓦は別としても伏見廃寺跡・腰浜廃寺跡の素弁系鍔瓦の技法はまったく異なったものである。腰浜の一本造りは同寺でその後確認できないが、伏見廃寺跡の印籠つぎ技法は信夫郡を除いた石背四郡から陸奥にかけての初期瓦から平安時代まで終始一貫行なわれる、いわば主流的存在にある技法である。接着技法は畿内では飛鳥時代・奈良時代前期にかけて行なわれ、印籠つぎ技法は飛鳥時代末期、接着技法によって百濟系・高句麗系の両者に採用され奈良時代前期より素弁系・複弁系の鍔瓦に多く用いられ一般化するものである。一本造り技法は印籠つぎ技法と近い時期に行なわれる技法で、もっとも年代の明確なものに大津京南滋賀廃寺跡出土の鍔瓦がある。近年大津京南滋賀廃寺瓦を生産した榎木原瓦窯跡の発掘調査が実施され、瓦当裏面中央に布しりり痕を残すのを特徴とした、いわゆる一本造り技法の鍔瓦が大量に出土しているが、これらの鍔瓦は時期的には天智天皇の大津京遷都（六六七）を前後した頃のもので一本造り技法としてはもっとも古い時期に位置づけられるものである。東北地方における最古の一本造り技法は腰浜廃寺の素弁系鍔瓦に行なわれており、その瓦当裏面の特徴から大津京南滋賀廃寺の鍔瓦と同一技法上にある。現在東北地方において伏見廃寺の素弁系鍔瓦と腰浜廃寺の素弁系鍔瓦が同一時期なのか、あるいは前後関係があるのかは今後の課題であるが、いずれにしても発掘調査によって出土した鍔瓦の技法を見るかぎり一本造り技法（第IV技法）は東北地方における造瓦のもっとも古い時期の技法の一つである。

最後になってしまったが古代東北地方は和同五年に出羽国の設置、養老二年には陸奥国南部地域を割いて石背石城の両国が設置される。つまり八世紀初頭には四か国が存在した。この八世紀初頭という時期は帝都も藤原から平城に移され、また大宝律令及び養老律令の完成施行、さらに諸国では風土記の編纂が行なわれるなど律令制組織の骨組がほぼ全国的に確立する時期である。またこの時期は前後して諸国の国府政庁が完成する時期で、郡内では各郡衙が整備される時期でもある。陸奥国を除いた三か国はこういった時代背景の中で設置されるものであるが、特に今回はこれらの中の石背国五郡の国府・郡衙及びその附属寺院跡出土の瓦について、あくまでも「屋瓦」の面より考えて見た。今後は当然のことながら土器の面からも考えて見なければならぬ問題である。本稿作成にあたり本学教授大川清氏、多賀城跡調査研究所進藤秋輝氏、石巻女子高校教頭佐々木茂楨氏、須賀川市立博物館永山倉造氏、郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団柳沼賢治氏、真保昌弘氏等の方々から御教示及び御協力を賜った。深謝

註

- (1) 井上国雄「流廃寺古瓦に関する最近の資料から」棚倉史談第4号 昭和五一年三月
- (2) 『東村史』東村村史編さん委員会 昭和四〇年
- (3) 内藤政恒「磐城国西白河郡五箇村借宿の遺跡遺物」考古学雑誌二三卷十一号昭和十年
- (4) 『関和久遺跡I-X』福島県教育委員会 昭和四十八年三月～昭和五

十七年三月

- (5) 『関和久遺跡』福島県教育委員会 昭和六〇年三月
- (6) 『関和久上町遺跡』Ⅰ 福島県教育委員会 昭和五十八年 三月
- (7) 『関和久遺跡』福島県教育委員会 昭和六〇年三月
- (8) 『大岡瓦窯跡』表郷村教育委員会 昭和六〇年三月
- (9) 永山倉造・木本元治「カニ沢瓦窯跡」関和久遺跡Ⅴ所収 福島県教育委員会、昭和五十二年三月
- (10) 『関和久上町遺跡』Ⅱ 福島県教育委員会 昭和五十九年三月
- (11) 「紺屋遺跡」天栄村史 二巻 資料編Ⅰ 昭和六十一年三月
- (12) この銅印は昭和四十七年に志古山地内で耕作中に発見されたものである。永山倉造氏によって「丈部私印」と判読されたものであるが、最近この内容について「丈部龍印」と改められた。
- (13) 皆川隆男『志古山遺跡』天栄村教育委員会 昭和五十一年三月
- (14) 大竹憲治『国造』天栄村教育委員会 昭和五十三年三月
- (15) 「龍ヶ塚古墳」天栄村史 二巻 資料編Ⅰ 天栄村 昭和六十一年三月
- (16) 伊東信雄『須賀川上人壇麿寺発掘調査概報』須賀川市教育委員会 昭和三十八年
- (17) 永山倉造『上人壇麿寺跡』須賀川市教育委員会 昭和五十六年三月
- (18) 上人壇遺跡に於いては内郭にあたる部分はいくつかの時期に区分できる様であるが、第一期つまり創建期の内郭の構成は以上の様になっているところである。上人壇遺跡の調査者である須賀川市立博物館永山倉造氏より御教示いただいた。
- (19) 永山倉造・関秀夫『米山寺跡史跡岩代米山寺経塚群発掘調査報告書』須賀川市教育委員会 昭和五十七年
- (20) 田中正能・草野喜久『清水台廃寺』郡山市教育委員会 昭和四十一年四月
- (21) 田中正能・高橋四郎・金崎佳生・渡辺昌広・大内晴夫・高松俊雄『清水台遺跡』郡山市教育委員会 昭和五十年三月
- (22) 梅宮茂・高倉敏明・吉田幸一・独鈷仁吉・伊藤堯信・金崎佳生・佐藤満夫・高橋俊雄・大越忠士『清水台遺跡―第三次発掘調査概報―』郡山市教育委員会 昭和五十一年二月
- (23) 『清水台遺跡―第四次調査速報―』―郡山市埋蔵文化財年報―郡山市教育委員会 昭和五十二年三月
- (24) 佐藤満夫・佐藤千春・高松俊雄『清水台』―推定陸奥国安積郡衛遺跡―第六次発掘調査概報 郡山市教育委員会 昭和五十九年三月
- (25) 金崎佳生・相原秀郎・鈴木雄三・渡辺昌幸・高松俊雄『清水台遺跡―第七次調査―』埋蔵文化財調査概報―昭和五十五年―郡山市教育委員会 昭和五十六年三月
- (26) 高松俊雄『清水台遺跡』―第八次調査報告―郡山市教育委員会 昭和六〇年三月
- (27) 高松俊雄『清水台遺跡』―第九次発掘調査概報―郡山市教育委員会 昭和六十一年三月
- (28) 金崎佳生、高松俊雄『郡山市清水台遺跡資料集(Ⅰ)』福島考古第十七号 昭和五十一年二月
- (29) 戸田有二『古代安積郡出土古瓦の需給関係』考古学研究室報告 甲種第四冊 国士館大学文学部考古学研究室 昭和六十年三月
- (30) 注(29)に同じ
- (31) 梅宮茂『郡山市麓山瓦窯跡』福島県埋蔵文化財調査報告書 福島県教育委員会 昭和三十五年

- (32) 内藤政恒・伊藤信雄・伊藤玄三『腰浜廃寺』福島県教育委員会 昭和四十年六月
- (33) 伊東信雄「福島市腰浜出土瓦の再吟味」―広島県寺町廃寺跡出土瓦との比較において『考古論集』昭和五十三年
- (34) 『腰浜廃寺Ⅲ』福島市教育委員会 昭和五十六年三月
- (35) 小滝利恵『居合団地埋蔵文化財発掘調査報告書』会津若松市教育委員会 昭和四十六年
- (36) 『いわき市夏井廃寺跡』新産業都市指定地区遺跡発掘調査報告書 いわき市教育委員会 昭和四十二年
- (37) 『郡山五番遺跡』ⅠⅡⅢ 福島県双葉町教育委員会 昭和五十三年三月
- (38) 『黒木田遺跡』相馬市教育委員会 昭和五十一年三月
- (39) 『郡山遺跡Ⅱ』仙台市教育委員会 昭和五十七年三月
- (40) 『宮城県史』34 資料集Ⅴ 考古資料資料篇11 昭和五十六年十月
- (41) 『名生館遺跡』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第六冊 宮城県多賀城調査研究所 昭和五十六年三月
- (42) 佐々木茂樹「宮城県古川市伏見廃寺跡」考古学雑誌、第五六巻第三号 昭和四十六年三月
- (43) 『三輪田遺跡』古川市文化財調査報告書第四集 古川市教育委員会 昭和五十五年三月
- (44) 進藤秋輝「東北地方の平瓦桶巻について」『東北考古学の諸問題』、東北出版寧楽社 昭和五十一年
- (45) 柴田俊彰・辻秀人・鈴木啓『腰浜廃寺Ⅲ』福島市教育委員会 昭和五十五年三月
- 木本元治・辻秀人・氏家浩子『関和久上町遺跡』Ⅰ・Ⅱ福島県教育委員会 昭和五十七・五十八年三月
- (46) 『名生館遺跡』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第六冊 宮城県多賀城跡調査研究所 昭和五十六年三月
- (47) 大江正行『金井廃寺跡』群馬県吾妻町教育委員会 昭和五十四年三月
- (48) (47) 同じ
- (49) 佐々木茂樹・新庄屋元晴『角田郡山遺跡』角田市教育委員会 昭和五十五年三月
- (50) 『いわき市夏井廃寺跡』新産業都市指定地区遺跡発掘調査報告書 福島県教育委員会 昭和四十二年
- (51) 瓦吹堅「大津廃寺跡発掘調査概報」北茨城史壇第五号 昭和六十年三月
- (52) 進藤秋輝「東北地方の平瓦桶型作り技法について」『東北考古学の諸問題』東北出版寧楽社 昭和五十一年
- (53) 注(29)と同じ
- (54) 注(34)と同じ
- (55) 注(29)と同じ
- (56) 注(5)と同じ
- (57) 「関和久上町遺跡」Ⅰ 福島県教育委員会 昭和五十八年三月
- (58) カニ沢瓦窯跡の出土遺物については調査担当者永山倉造氏の御高配により直接瓦の整理をさせていただいた。この報告については後日あらためて行ないたい。
- (59) 瓦吹堅「大津廃寺跡発掘調査概報」北茨城史壇第五号 昭和六十年三月
- (60) 戸田有二「古代石背・石城地方に於ける初期古瓦の様相」―複合波文縁六葉複弁蓮花文鑑瓦を中心として―唐澤考古五号 昭和六十年四月

- (61) 上人壇遺跡の第一期平面図については調査担当者である須賀川市立博物館学芸員永山倉造氏の見解によって作成したものを使用させていた。
- (63) 註(60)と同じ
- (64) 『下野国府跡』I-VI 栃木県文化振興事業団 昭和五十五、六十年
- (65) 『多賀城跡』政庁跡本文編 宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所 昭和五十七年
- (66) 波文縁六葉複弁蓮花文鍔瓦については「古代石背・石城地方に於ける初期古瓦の様相」唐澤考古第五号でその系譜、形態などを論じた、詳細はそれにゆずる。
- (67) 佐々木茂樹「宮城県古川市伏見廃寺跡」考古学雑誌 第五六巻第三号 昭和四十六年三月
- (68) 辻秀人「陸奥国南部の造瓦技法」―腰浜廃寺、関和久遺跡出土瓦の検討―大平臺史窺第三号 昭和五十九年十月
- (66) 伊東信雄・伊藤玄三・内藤政恒『腰浜廃寺』福島市教育委員会 昭和四十年 六月
- (70) 伊東信雄「福島市腰浜出土古瓦の再吟味」―広島県寺町廃寺跡出土瓦との比較において―『考古論集』昭和五十三年
- 『腰浜廃寺』I 福島市教育委員会 昭和五十四年 三月
- (71) 註(67)と同じ
- (72) 石黒伸一郎「宮城県色麻町土器坂窯跡出土の遺物」陸奥国官窯跡群IV古窯跡研究会 昭和五十六年
- (73) 天野努・今泉潔・小林清隆『成東町真行寺廃寺跡研究調査報告』千葉県文化財センター 昭和五十九年三月
- (74) 天野努・飯田正一・郷堀英司『市原市二日市場廃寺跡確認調査報告』千葉県文化財センター 昭和五十九年三月
- 須田勉「房総の古瓦に関する覚書」古代六四号 昭和五十三年
- (75) 註(74)と同じ
- (76) 前章「波文縁六葉複弁蓮花文鍔瓦について」で東北地方南部及び茨城県北部地域に分布形態をもつ波文縁複弁系六葉鍔瓦については他の瓦のセット関係からⅢ期に分類した。
- (77) 進藤秋輝「多賀城系古瓦の二系統」研究紀要V 宮城県多賀城跡調査研究所 昭和五十三年三月
- (78) 石黒伸一郎「宮城県色麻町土器坂窯跡出土の遺物」陸奥国官窯跡群IV古窯跡研究会 昭和五十六年三月
- (79) 註(78)と同じ
- (80) 『いわき市夏井廃寺跡』新産業都市指定地区遺跡発掘調査報告書 福島県教育委員会 昭和四十二年
- (81) 内藤政恒・大場磐雄・篠崎四郎「上総国九十九坊廃寺趾調査報告」史蹟名勝天然記念物第九集第九号 昭和九年九月
- (82) 平野元三郎・滝口宏『上代仏教遺跡調査豫報』千葉県史蹟名勝天然記念物調査 第十四号
- (83) 大川清「上総光善寺廃寺」古代 二四号 昭和三二年五月
- (84) 「大岡瓦窯跡」表郷村教育委員会 昭和六〇年三月
- (85) 永山倉造・木本元治「カニ沢瓦窯跡」関和久遺跡V 福島県教育委員会
- (86) 註(29)と同じ
- (87) 石城北部で見られる技法は腰浜廃寺跡のものとは、細部にわたっては若干異なるが一応ここでは同種の技法としてとらえて行きたい。この技法については国士館大学考古学研究室報告 甲種第三冊「入道迫瓦窯跡発掘調査報告」昭和五十九年刊行を参考にされたい。

- (88) 大川清・戸田有二 考古学研究室報告 甲種第三冊「針生・原田瓦窯跡」 国士館大学文学部考古学研究室 昭和五十九年三月
- (89) 古川市伏見廃寺跡出土の八葉素弁蓮花文鍍瓦は故佐々木忠雄氏採集のもので現在古川女子高等学校郷土資料室に保管されている。筆者はこの瓦を古川女子校のはからいで実見することができた。
- (90) 註(67)に同じ
- (91) 「南滋賀廃寺瓦窯」 榎木原遺跡発掘調査報告 滋賀県教育委員会 昭和五〇年

(本学専任講師・考古学)